

ふじみの



17

東京農大畜友会

心じみの新号 修正

14-33

日本鶏の嘆 嗚か？ 嗚か？
 教授 吉村喜彦 → 教授 村喜彦
 教授 石島芳郎 → 即教授 石島芳郎

5 渡辺誠彦 → 教授 渡辺誠彦

7 平林忠 → 教授 平林忠

8 吉田重台 → 教授 吉田重台

12 石島芳郎 → 即教授 石島芳郎

14 大谷忠 → 農場講師 大谷忠

16 豊場 鈴木伸一 → 農場講師 鈴木伸一

米 (坂川行祖)

倉庫1年 → 倉庫2年
 (坂川行祖)

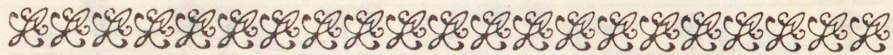
人向か人向と語り合え日く成り上り → 人向か人向と語り合
 え日く成り上り

況 (坂川行祖) 国立教育研究所が全国の高等校長から → 国立教育
 研究所が全国の高等校長から
 (坂川行祖) 多岐の教育界に在る問題が有る → 多岐の
 教育界に在る問題が有る

41 (坂川行祖) 秋一語に「いびきかき」 → 「一語に駭いては
 ないか」

46 (坂川行祖) 伊藤澄麿に教授 → 伊藤澄麿に教授

55 必志志字分は長谷川より助立したい。 → 必志志字分は
 長谷川より補用立小等した。



巻頭言

畜友会委員長

草野

茂

「己れに克て」
前に、この言葉を、私は読んだか聞いたかした事がある。その日以来、この言葉が常に私の心の中に響いている。

私が畜友会の委員長をしていた時も、常にこの言葉が、私を戒しめてくれた。仕事に対する責任からの逃避、又、決断の瞬間からの逃避の気持が、頭をもたげてくると、そのつど「己れに克て」 「己れに克て」と心の中にさげんだ。

人間だれしも楽をしたいという気持はある、しかし、その気持を戒しめてくれるものは、もう一つの己れの気持である。私自身これからの人生の中で、かならず、苦からの逃避の気持が出てくると思う、が、そのつど私は、心の中で「己れに克て」と叫んでゆきたい。

最後に思う。

己れの最大の敵、それは、己れの心である。



表紙の言葉

大地に深く根をおろせ

大地に深く根をおろしているものこそ、

最後に勝つのだ。

平良元秋

77. 秋

ふじみの目次 第17号

巻頭言 畜友会委員長 草野 茂 1

特集1

1977 畜産学科長 一戸 健司 4

立春の卵の秘密 教 授 渡辺 誠喜 5

わたしの歩いた道 教 授 平林 忠 7

生物発生の原則と人生 教 授 吉田 重治 8

家畜油子の凍結保存の現況 教 授 吉村 喜彦 10

厚木農場より

牛作りとは 農場 講師 大谷 忠 14

日華養豚研究会議に参加して 農場 講師 鈴木 伸一 16

特集2

魚粉に代る動物性蛋白源について 畜産三年 豚々 魔 19

おいしいミルクの搾り方 畜産二年 所 賀雄大 20

詩

黒山羊 畜産二年 庭 義一 22

光陰 畜産三年 小林 庄一 27
 只今自殺中につき 畜産二年 クリメン・アモリス 27
 自分を思う 畜産二年 平 良元秋 29
 風まかせ 畜産二年 所 賀雄大 30
 速くどこかで 畜産二年 所 賀雄大 31

随想

我が収穫祭回顧録 畜産四年 杉 山 康雄 31
 手紙のある世界 畜産二年 山 中 鹿之介 34
 ちよっくら考え御覧じろ 畜産二年 東 農 大 児 36
 翔べおのれの中の鳥 畜産二年 栗 原 政 宏 39
 畜友会に想う 畜産二年 高 下 徹 40

研究室だより

昭和五十二年度卒論文題目
 。家畜繁殖学研究室 畜産種学研究室 44
 。家畜飼養学研究室 家畜衛生学研究室 48
 。家畜生理学研究室 畜産経営学研究室 52
 。畜産物利用学(肉)研究室 畜産物利用学(乳)研究室 55

畜友会より

昭和五十二年年度畜友会行事報告 56
 昭和五十二年年度畜友会会計報告 57
 畜友会規約 59
 編集後記 64

円高、不況、二〇〇海哩水域、と目まぐるしく変転する昨今の世相下においては、畜産業界も一大変革期に直面していると言わざるを得ない。二〇〇海哩水域の設定は、漁獲高の制限に伴う動物蛋白資源の欠如より国内畜産業の再開発を示唆するが、一方円高に伴う貿易の不振を打破するためには、輸出の制限、輸入の増大を強力に推進せざるを得ない実状を招来し、その結果安価な畜産加工物が大量に導入される事態は当然考えられることである。

この様な現状下におかれては、畜産教育の前途は極めて厳しく、またこの様な事態に対処するためには高度の知識と技術を修得し、如何なる局面に遭遇してもこれを克服し得る実力の養成が必要である。

当畜産学科は昭和三十六年、現在の世田谷に移転して以来、その地理的環境からやゝもするとその本来の主眼である「如何なる局面にも対処し得る技術者の養成」から、「実験室内での研究者の養成」へと走り勝ちである様に思われるが、この様な一大変革を要求される世相下においては、その本来の姿に立ち戻り「技術者の養成」を骨子とすることが当学科の発展に寄与し得る道と考え、平林忠、鈴木正三両前学科長の御教訓のもと粉骨碎身する所存である。諸先生方の御協力のもと、学生諸君の自覚と若き情熱を最大限に発揚させ、本学発展のために微力なりとも寄与出来れば幸いと思ひ、こゝに一筆したゝめた次才である。

日本鶏は嘆く、嘘か真か？

渡 辺 誠 喜

近年は情報過多の時代とよく言われる。事実、我々は毎日、テレビ・ラジオ・新聞、各種雑誌その他諸々の情報網の中に漂っている感じである。勿論これら情報が不必要であるなどと野暮なことを考えている訳では決してない。我々はこの数多い情報に接し、真にこれをキャッチし、生活、特に学問的な面に生かすべく努力することは極めて重要である。

しかるに多くの情報の中には、どうも納得出来ない、理解し難いことがあり、困惑した経験を有するのは必ずしも筆者のみとは思えない。

例えば去る11月21日、朝日新聞の夕刊記事の一部を抜粋してみると次の様なものがある。念のために全文を掲載すると、……。

「大地鶏」復元に成功す 絶滅していた秋田原産の日

本鶏「大地鶏」がこのほど新潟県日本鶏作家連盟で復元された。絶滅種の復元例は「明治時代に九州原産の九連子鶏を埼玉の人が成功して以来（同連盟）」という。同連盟によると、秋田大地鶏は羽色が褐色で、成鳥の重さは四キロにもなると云う大型種。肉質は淡泊で、キジなどに味が近いことから、名物料理「きりたんぼ」に欠かせないものとして重宝され、数が減少。戦時中の食糧難で完全に地上から消えてしまった、という。復元には江戸時代の絵や昭和初期の写真などを参考に、大地鶏に最も近いと思われる秋田の比内鶏（国の天然記念物）を使い、交配を続けた。しかし大地鶏の冠が単冠であるのに、比内鶏は三枚冠で、これは失敗。そこで単冠を持つ中型種の岐阜の褐色地鶏を比内鶏と交配してみた。研究は米村役場職員の小出さんのほか、岡村守さん、佐藤正さんの三人によって続けられ、それぞれが冠、大型化、羽色の改良を分担した。その結果、一昨年ごろから原状に近いわとりが出来たようになった。そして七年目の今春、全部が大型で、単冠を持つ大地鶏の復元に成功した。この間、一人が扱った鶏は一年で五十〜六十羽。三人で七年間に千三百羽近くを取上げたことになる。

そこで筆者は早速「大地鶏」なるものがこれまで秋田地方に存在していたのか、どうかにつき2、3調査した。先ず日本養鶏史（昭和十九年三月発行、帝国畜産会）、日本鶏の歴史（昭和十七年、小穴彪著）を精いた。両書書共に日本鶏について述べてあり、特に後者は日本鶏に関する数少ない、貴重な文献とされているものである。しかるに両著書には共に「大地鶏」なる言葉すら探さずと出来なかった。ただ、日本鶏の歴史に『現今保存されている地鶏は普通地鶏と小地鶏だけであるが、古老の言に徴するに古い頃には、相当大型のものも居ったようである』と述べられている。従って、あるいは古く大型地鶏なるものが存在していたのは確かとも思われる。従って日本鶏を研究の一つの対象として考えている筆者には大地鶏なるものが現存して呉れたらば……と云う願望は強い。しかし、それが復元されたもの、あるいは復元されたと放道されたものであっては極めて不味いものであり、困ったものである。

「復元」とは国語辞典によらなくとも、その意味は、もとの位置あるいは状態に戻すこと、であろう。

先きに抜粋した朝日新聞の記事によれば、比内鶏と岐阜地鶏とを交配して作出したものであり、この鶏は交雑

種より新しい品種（品種として認めうるかどうかは極めてむづかしいが）を作出したものであり、その交雑種がたまたま、大地鶏に類似していたと云う事であって、決して大地鶏ではない、と考えられる。新品種の作出は一般にこれまで多くの育種家が試みて来た事であれ、これら諸先覚者の努力の賜が現存する各家畜における品種であろう。従って今後も新品種の作出は困難なことで、一朝一夕にしてなしうるものではないが、重要なことであるので、その努力は必要と思う。しかし、そこで作出された新品種が現存する、あるいは過去に存在したある品種に極似しているからと云って、これら品種の復元である等と考へてはならない。

その様なことがあつては、日本鶏は嘆くぞよ……。

立春の卵の秘密

平林 忠

いつ頃からいゝ伝えられたか知るよしもないが、立春に卵が立つといわれ、それを実現することの出来る人を二、三知っている。その人たちは卵が直立する理屈を解明してくれないから、あれこれ考へてみた。

その昔、コロンブスが一つの卵をテーブルの上に直立させることが出来るかどうかと、大衆に問いかけた。大衆はいれかわりたちかわり卵を立てることに熱中したけれど成功しなかった。そこで、コロンブスはやおら卵を取上げ、その卵の鈍端（気室のある方）の一部をたたいて凹ませて、テーブルの上に直立させた、ところが大衆はそのなことをすれば立つのがあたりまえだとさわざいだした。

コロンブスは大衆に向つて、結果がわかればなんだからんことかという事柄でも、最初の発想には苦心するものだと説明して、さわぎをたしなめたさうである。これをコロンブスの卵といゝ伝えられている。

立春の卵はこれとは違って無傷の卵をたせるところに神秘さがあり、魔術的でもある。さらに、立春に限るところにもいわくがありさうだとも考えられた。

魔術師に率直に尋ねたところ、立春に限ることはなく、卵が新鮮（うみたて）なものであればよいとの条件であつた。それが条件ならば新鮮でない卵との内容の差違が立つことに関係すると推理できる。

卵の新鮮なものは卵黄をとりかこむ卵白が濃厚卵白と水溶性卵白との層状であつて、特に濃厚卵白は卵殻の鋭端内面に一部が膠着している。そこを濃厚卵白尖端突起（千島喜久男氏が命名した）と名付けられている。その尖端の接着点が遊離すると卵黄と卵白のすべてが鈍端の方へ片寄ることになり、鈍端を下にして立てると、重心が低下するから、静かに卵を立てるとそのまゝ立ちつゞけるのである。

卵が古くなると卵白は水様化するから、特に重心が下らなくなり、そのためたたなくなるのである。

濃厚卵白の尖端突起を卵殻から遊離させるには卵を手早く回転したり、縦にふったりすればよいのであつて、特別、神秘的でも魔術的でもなく、卵を直立させることが出来たから、立春の卵の秘密は了解できた。（秋の彼岸に記す）

わたしの歩いた道

吉田重治

同じような内容のことをかって講演したことがあるが、畜友会から執筆を依頼された機会に、お役に立つかどうか分からぬが、文章にさせていたゞきたいと思つて筆をとつた。

わたしは草地研究の道に入ったのは、大学卒業直前の三月、将来面白くなる仕事だからとの恩師のすゝめで農林省の試験を受け、牧野（ぼくや。本邦在来の草類が生えている自然草地）担当の行政官になつたのがきっかけである。当時牧野法は制定されてはいたが、日本の大学では全く教えていない分野であつた。担当した仕事は、牧野改良事業に補助金を出し、後日その事業の検査をするのである。しかし改良事業とはいつても土木事業主体で、肝心の草のことは何もしていなかつた。それもそのはず、当時は対応できる技術が開発されていなかつたのである。よし、それではと意気込んでみたものゝ、一歩牧野に足を踏み込んでみると、雑然と種々雑多な草が生えていて、何から、どのように手をつけてよいのか皆目見当がつかない。この道の唯一の研究者であつた大迫元雄氏は一年前に故人となられていたし、あらゆる農学書を読ん

でも解決の道は全く示されていない。こんなはずはないと思ひながらもつくづくと農学の力不足を思い知らされた。そんな折、卒業の際の恩師の助言を思い出し、藁をも握む気で生態学の勉強を始めた。幸にも当時山林局（現林野庁）では生態学の手法を用いて全国の森林植生調査を実施していたので、その調査法の手ほどきを受け、練習してみた結果、これなら複雑な牧野群落切崩しの武器になると思ひ、その後は出張のたびに本務は早々に片付け、植生調査に熱中した。そのおかげでわたしの知識も徐々に確実かつ豊富になり、しばしば主任技師をやりこめるようになった。しかし特にわたしの心をとらえたことは、大迫が後退的遷移系列の中に出現すると主張するチガヤ期草原が、存在しそもないということであつた。もしこれが事実なら、新発見となることは間違いないので、意気大いにあがつたものである。ところが本勢に忠実でないということ、さらには学閥という面白からぬ事情もあつて農林省生活は五年弱で終止符を打ち、東北帝大に移つた。我国大学における第一号の研究室が誕生したわけである。

大学に移つて後もこの調査を続け、第二次大戦終了時には相当な資料が集積されたのであるが、纏めるための理論が見出せず、思わぬ壁に突き当たってしまった。丁度その頃、前記山林局の森林植生調査の結果が少しも行政に反映していないという強い批判が出ていることを耳にし、仲間ができたとホットした反面、大きな不安におそ

われた。しかも長期療養を要する病にかゝり、いらだたしい日々を送ることになった。毎夜枕もとにノートとペンを置いて寝たのもこの頃であつたと思ふ。だが一寸しははずみに、今思えば何んでもないことだが、牧野植生は一夜突如して容相を変えることはなく、漸進的な変化でなければならぬはずだと思ひついた。これを具体的な形に体系化することによつて、調査した牧野の位置づけも簡単にでき、理論的論議が可能となつたし、大迫のいうチガヤ期草原出現を否定することも難なく解決した。

以上の内容を戦後の混乱期に、誤植だらけの印刷で発表した。学位論文にこの話もあつたが、少々重み不足だし、第一に、山林局の例もあり、農学的でないことが気になるし、さらに時間をかけることにした。その結果は、植生後退の現象は利用過度によるといわれながら、その過度の程度を明らかにしていなかつたので、利用の限界を知ることゝ、利用限界量を守れば植生も生産も安定すること、さらには利用限界量は多年生草類から成る牧野の真の生産量であるという理論を展開し、これと前述の論文と一緒にして学位を請求し、草地関係第一号の学位を受けた。

生態学が草地研究にきわめて有効であることは身にしみて経験したことであるが、生態学が有効であればあるほどわたしの頭の中で大きく育つていった問題は、生態学を農学の中に取込んでしまいたいという願であつた。いかに生態学が有効な理論を持っているにせよ、草を育

だてることにかけては生態学は全く無力である以上、農学の中に消化、吸収することを企てるのは先駆者の責務でもあろう。その生態学を自家（農学）薬籠中のものにした第一号作品は前記植生遷移の問題である。つまり後退的遷移は利用過度によつて起こるといふことは、草類の再生力を奪うような酷使をすることであるから、用語の違いだけで、草の再生の問題に転換できる。これがきっかけで後は案外簡単に消化できたが、全般的に満足できる結果を得たのは、案外に時間がかゝり、わたしの停年近い頃である。最終的に得た結論は、良い群落構造は高い生産をもたらすことであつて、この理論によつて草地学を体系づけることができた。草地改良（造成）は良い構造を持った群落を作ればよく、草地利用はこの群落構造を維持するような利用方法をとればよいし、草地管理は良い群落構造が作れるように環境を整備すればよいのである。これが生態学を消化したわたしの草地学である。

総じて学問といわれる科学にはかならず背骨となる理論がなくはならぬ。現在はどうか知らないが、わたしが学生の頃は、教授連中は、俺の学問はこれだ、と熱っぽく講義されたものである。この雰囲気は感化されていたのか、また草地研究の開拓者扱を受けていたためか、いつの日にか、自分の手で、草地学を、という執念がいつとはなく育つていたのかもしれない。研究は一步一步の積重ねであるから根気も必要だし、闘志もなくてはならぬ。これからはさらに良い学問にしたいと考へている。若いぼれてはおれないのである。

生物発生の原則と人生

教授 吉村喜彦

ドイツの生物学者ヘッケルが、ダウイン(著書「種の起原」Origin of Species 一八五九年)の自然淘汰説「生物は内外の要因によって変化するものであって、単純なものから複雑なものへ、下等なものから高等なものへ次第に移す」を更に拡張して、現在生物発生の原則といわれている次のような説を主張した。

「各動物の個体発生中に、その属する種族が過去において経過した進化階段を要約的に再び繰り返す。すなわち、個体発生は系統(種族)発生の縮図である。」この説を簡単に説明してみよう。たとえば、ある種族がその系統発生において、仮りにA、B、C、D、Eの階段を経過して現在に及んだとすると、その種族の各個体は、その発生(個体発生)において、大体これらの階段に相当するa、b、c、d、eの発生階段を経て成体になるというのである。

この生物発生の原則は、一般に生物学の領域の問題としてのみ取り上げられているが、私は、ヘッケル説の考え方は、人間形成の過程の面にも当てはまると考えている。

人は、自己を表現することから出発し、他者との関係における自己を認識し、自己主張をつづけながら発展していく。赤ん坊は、自己主張を泣くことによって表現し、幼児は、いたずらをするによって、自分の存在を大人に知らせる。また、パパ、ママ、という言葉で憶えることから始まって、自他との区別を知り、わがままという自己主張(親馬鹿はこれをカワイイという)をくりかえしながら成長していく。このよう生物学的な成長過程の中で、「自我の目ざめ」があり、肉体的発達と共に、精神的発達も遂げられていくのである。今これを人間性 *Humanity* の追究といひ代えてみよう。歴史の発展と共に、人間の考え方が変わってくる。古いものから新しいものへである。仮りに、歴史の区切りを一世紀ずつにして考えるならば、二十世紀の人々は、十九世紀の人々の考え方のある部分否定し、ある部分は肯定して自らコントロールすることによって、今日の自己の存在を規定したわけである。しかし、それは自分だけでなく祖父母

から、両親から、師から語り伝えられた部分が大変多い。しかも、その内容は、決してその人だけの人生経験でなく、多くの人々の共通的特殊的な経験を含んでいる。ということとは、少なくともそれらの人々が生涯における知る限りにおいて、数世紀にさかのぼるのである。今、中国において論語の見直しが行われているという。論語とは、孔子の教えである。たとえば、数々の教えの一つに、「身体髪膚これを父母より受け、敬て毀傷せざるは、孝の始めなり。」戦前の中学生ならば誰でも習った有名な言葉であり。わかり易くいえば、自分の身体は両親から貰ったものである。病気にならないことが、先ず第一の親孝行である。という意味である。この考え方は、結婚披露宴の主賓の挨拶にもよく引用される。つまり、数世紀も前の先哲の考えが、今の人々の心の中にあるという事は、数世紀前から今日までの多くの人々の経験の要約を現在の人々が受け入れているのである。

とするならば、ヘッケル説の個体発生は、系統発生の縮図であるということと一致させて考えることができると思うのである。

広い意味で、学問の世界も亦然りである。学生諸君の受ける講義・実験は、教授する学者のオリジナリズム

にしる、一般的なものにしろ、その内容は、先輩・先輩の学者が研究してきた過程と成果を、要約し、発展させて講義しているわけである。とするならば、ヘッケルのいう、「過去において経過した進化階段を要約的に再び繰り返す。」ということを勿論更に発展はするのであるが、人生の各処でみることができると思う。そして、最も大切なことは、この成果のみを学ぶより、その過程を追究する心情が大切であると思う。

家畜卵子の凍結保存の現況

石 島 芳 郎

家畜の受精卵移植を繁殖技術として実用化するには、移植に用いる卵子を、人工授精の凍結精液のように長期間保存する方法の確立が不可欠である。そうすれば、現在移植時に行われている卵子提供雌 (donor) と卵子受容雌 (recipient) との性周期の同期化が必要なくなるし、遠隔地からの卵子の輸送が容易になるので、移植の実施が一層有効となる。

そのために、これまで家畜卵子の凍結保存の技術開発が積極的に行われてきたが、経済家畜をいれ、それと研究に使えないことと、それのたしかな方法が確立されていないことから研究が立ち遅れていた。しかし、一九七〇年代に入ってマウスや家兎の卵子が有効な凍結保存技術が確立されるに至って、やっと家畜においても期待できる成果が報告されるようになった。まだ成功例はごくわずかであるが、現状を紹介しておきたい。

家畜卵子の凍結保存の成功は、先に触れたように、実験動物の研究成果に負うところが多いので、本論に入る前に若干いささつを述べておく。

実験動物を対象にした卵子の凍結の研究は、一九五二年に Smith がウサギの卵子をマイナス二〇℃およびマ

イナス一九〇℃に凍らせても生存の可能性があることをみいだしたのが最初で、ついで一九五八年に Sheehan がマウスの未受精卵 (Eggs) がウサギの受精卵で、それぞれマイナス七九℃に凍結するのに成功している。しかしこのときの成績は、成功率が低くみるべきものはなかった。その後、十数年はこの問題を顧みる者はなかったが、一九七一年に突然本格的な成果が登場した。それは、イギリスのケンブリッジ大学の Whittingham の報告である。

氏は、マウスの八細胞期および胚盤胞の胚を、マイナス七九℃に凍結後融解してもかなりの胚が生存していることを培養でたしかめたのである。

つづいて翌一九七二年、同氏は各時期の胚をマイナス一九六℃、一部はマイナス二六九℃に凍結しても、凍結保護剤にジメチルスルホキシド (DMSO) を加えておけば、融解後の胚はかなり高率で生存していること、しかも移植により正常な子となることを証明した。

こうした Whittingham の報告は、他の研究者を刺激する結果となり、マウスはもとより、ウサギ、ラットなどで続々成功するようになった。Whittingham 自身は、その後、マイナス一九六℃に二二二日という長期間保存した胚を移植して正常な産子を得るといふ画期的成果も挙げている。

わが国でも、明大の尾川らがウサギ、岡大の内海らがラット、京大の宮元らがマウスでほぼ完全な卵子凍結技

術を完成している。因みに、宮本らはマウス卵子をマイナス一九六℃に二十一カ月という長期間保存することに成功し、最長記録を書きかえている。

さて本論にたしかかえて、家畜卵子の凍結に関する研究の現状をみておこう。

家畜卵子の凍結保存は、今のところウシ、ヒツジおよびヤギで数例成功しているにすぎない。

家畜卵子の凍結に最初に成功したのは、イギリスの Agricultural Research Council (A.R.C.) Swilmit と Rowson の二研究者で、氏は一九七三年にマイナス一九六℃に凍結したウシ卵子がわずかに二例ではあるが移植により子ウシを得た。これは五〇個の凍結卵子のうちの二個が成功したもので、決して大成功といえるものではないが、可能性を示唆したことで世界中から注目された。

一九七五年、A.R.C. Wilmut, Polge および Rowson は、さらに成果を高めるべく、ウシの桑実期胚をマイナス一九六℃に凍結して、融解後の生存率をウサギの卵管に移植することでしらすべ、二十六個中二個に発生をみとめてゐる。その翌年 (一九七六年) 同じく A.R.C. Wilmut 等は、ヒツジの卵子にも研究をすすめて、二〜十六細胞期の卵子をマイナス一九六℃に半日〜三十日保存して、培養による発生率五十二個中十一個、また移植により八個の卵子から三頭の子ヒツジが得られたことを報告している。

一方、オーストラリアのシドニー大学の Billon と Moore は、一九七六年に、ヒツジ卵子をマイナス一九六℃に凍結して融解後高率 (十三個中八個) に胚が生存すること、さらにウシの卵子についても、桑実期および初期盤胞の胚を凍結し、三十九個のうち十六個の胚が培養により発達し、そのうちの一個は移植により正常な発育がみられたことをあいついで報告した。氏はヤギの卵子についても凍結に成功したというが、論文を入手してないので詳細は不明である。

以上が一九七六年までに報告された家畜卵子の凍結の成果のすべてであるが、一九七七年に入って Billon と Moore のチームは「凍結したウシ卵子をニュージーランドからオーストラリアに輸送することに成功した」といふ画期的な論文を発表している。それによると、ニュージーランドの Christchurch で凍結したウシ卵子 (桑実胚および早期胚盤胞) オーストラリアのシドニーまで空輸し、さらに二〇キロメートル離れた Mittagong に陸路を輸送して、融解後移植した結果二十四個の卵子のうち五個が生存していたという。これに用いた卵子は二〜三カ月凍結保存したものだといふことなので、輸送に初成功しただけでなく、現時点の保存最長記録でもある。

このように、家畜卵子の凍結保存の研究も順調にすすりだしているが、まだマウスやウサギ卵子の成果にはほど遠い現状にある。わが国ではまだ残念ながら成功例はない。

「牛作りとは」

大 谷 忠

近年の酪農家は、体型上立派な牛を作ることに専念し、少しづつ完成に近づいてきている。現に全日本ホルスタイン共進会をみても、才一回に比較して、最近の才六回の乳牛は、酪農先進国（カナダ・アメリカ）における乳牛の体型に近似している。しかし、これはうわべだけであって、日本独自の乳牛改良ではなかつたように思われる。すなわち、共進会において、優等賞何席かを取つたと云つて喜び、誉めたたえられた牛も、分娩後の泌乳量の少なさや、数年にして、見るも無残なタイプに変貌してしまつたと云う例は、数多くあるし、また、血統登録の牛より、雑種の方がより丈夫で、乳期が長く、乳量も多いと云うことを、しばしば聞く。そして私自身も何十例かそれを経験している。

このような原因は何にあるのだろうか。探索するといろいろあるが、何んと云つても、これは不安定、かつ不良給餌に一因があることが事実で、日本の乳牛界では、

（特例をのぞいて）長期飼養における良質飼料の給餌が、無理と云うところにある。

最近の泌乳量世界一（三六五日検定で二一三七五キログラム）を記録したのは、アメリカの一酪農家であるが、これも広大な土地を持ち、通年的に、粗飼料給与ができたと云う基盤に立っていたからで、やはり、良い牛は、良い餌を多く与えることにほかならないのである。

しかし、泌乳量世界一は、昔日本でも記録したことがある。それは、飼料畑が最も少いと思われる、東京都の一農家である。と云つても、東京から数百キロも離れた八丈島のことで、その乳牛が、世界一の記録を達成したのだから驚きである。これは通説ではあるが、八丈島に一年中群生している、八丈ススキを、粗飼料として給与したためと云われている。この八丈ススキは、化学的に分析してみると、普通の牧草に比べて、大した違いはなく、かえつて劣るものであった。それにもかかわらず、この偉業を達成し得たことは、やはり飼料給与が安定している、広地所有の酪農先進国と同じように、常に同じものを与えたことが、最大の理由なのであろう。

そこで、現在の日本の乳牛界が、一般的に、どのような飼養形態であるかを考えてみよう。

気候的に不順な年は、牧草が足りないと云つては、稲わらを多給するし、安いと云つては粗飼料として、ビール粕、豆腐粕、グルテンフィード（トウモロコシから澱粉を取つたもの）、そして、不安定と分りきつてゐる、外国輸入飼料（ビートパルプ・ヘイキューブ）などを争つて導入しており、国土の狭い日本では、このような状態が続いているのである。これであつては、いつまでも日本に適した良い牛ができるはずがなく、そのために、常時、安定して給与できる草資源の研究開発しか考えられない。

それでは、わが国における飼料作物作りは、どのような水準にあるのだろうか。

北は北海道、南は沖縄まで、気候的には相当違う地方でも、トウモロコシ、ソルゴーと云つた、飼料作物の代表的な一年生作物は、ほぼ技術的に、他の国と比して劣らないほど高収獲を得るが、多年生作物である牧草に関しては、全く貧弱な低レベルの栽培技術しか持ち合せてゐない。すなわち、高額な費用で開発し、耕起した牧草地が数年で荒廃して、また更新する状態である。本学の吉田教授も、「一度作つた北欧の牧草地は、数十年から百年近くまで維持している」と云われているが、この維

持管理技術が、今の日本ではおこなわれているのである。日本は、北欧の気候条件と違うから、どうにもならないと云う考え方もあるが、その気候的条件に類似している北海道でも、私が二年前に視察した時は、内地に比べて、一見すばらしくは見えたが、詳細に観察すると、牧草の株数密度は低く、期待するほどの収量はないように思えた。また、各方面でも、研究者らが考えられる種々の要因を除き、実験的に栽培管理した牧草地も、思うように維持できないでいる。つまり、わが国の牧草栽培は、まだ適地適作品種が完成されてないことと、またできていたとしても、その栽培技術が確立されてないのである。

このような現況であるから、良質、かつ豊富な草を、牛に供給することができないのは、当然のことである。優良牛を作るには、この立ち遅れた牧草作りを完成して、始めて可能なものになるのであるから、酪農関係者は、是非この点を考慮して、草作りを専念しなければならぬと思ふ。

昔の人が云つた、「牛作りは、草作りから」の名言は、酪農を担当している私自身も、痛感しているし、誠にすばらしい言葉と思ふ。

日華養豚研究会議に参加して

農場 鈴木 伸 一

才一回日華養豚研究会議および台湾養豚事情視察に参加したので、その概要について報告します。
期間は昭和52年11月14日から20日までの七日間であり
ます。

研究会議は台湾省苗栗県竹南の台湾養猪科学研究所で開催された。

研究会議の内容は、

- 一、豚の人工授精―特に精液の保存・輸送と注入の技術について(丹羽太左衛門先生)
- 一、台湾の液状豚精液の人工授精の普及および凍結精液の研究(才・福江先生)
- 一、豚の伝染病研究(笹原二郎先生)
- 一、豚の疾病の研究(林 再春先生)
- 一、豚の栄養飼料研究上の問題点(高橋正也先生)
- 一、台湾における養豚低蛋白飼料の研究と実用について(葉 澤波先生)

この二つの組織は同一敷地内にあり表裏一体の関係にある。

- 三、台湾省畜産試験所苗栗種畜繁殖場(崎頂)主に北部一帯への豚精液配布と牧草の種子の生産をしている。
- 四、埔里養猪專業区：台湾のほぼ中央にあり、果樹(バナナ・マンゴー等)との複合経営で糞尿は全て圃場に還元している。各農家とも種豚5〜6頭、肉豚50頭であった。
- 五、台湾省畜産試験所彰化種畜繁殖場(北斗)親豚繁殖と生殖生理の研究、ガチョウの品種改良、クロレラ生産と豚への応用、メタンガスによる給湯および発電等の研究、甘藷の生産利用研究、牧草栽培と観察試験、豚の人工授精と精液品質研究、畜牧生産技指導を行っている。
- 六、雷厝養豚專業区：海岸地帯で国が強く耕種農業が困難な為に養豚導入をしたところで農家当種豚6頭、肉豚50頭、そして糞尿は養魚に利用している。
- 七、朴子家畜市場：農協経営でコンピューターを使用して肉豚のセリを行っている。
- 八、賓福農牧公司：一貫経営で四〇〇〇〇頭管理している。

一、豚の登録と審査(小春英世先生)

一、豚種改良センター能力検定ステーション(班)検定効果測定班の種豚登録班(宋 永義先生)

一、豚の枝肉および部分肉の規格と格付(和田治男先生)

一、台湾肉豚の枝肉取引規格の設定と推進(黄 以圭先生)

以上両国より、五つのテーマについてそれぞれ報告され、活発な討論が行われ、最終日にコメントが出された。

発表者以外の参加者は日本側19名、中華民国側44名、そして来賓は農林庁長官および次官等7名であり、国を挙げて開催され盛会であった。

研究会議終了後次のところを視察した。

- 一、台湾養猪科学研究所：一九六八年に国連の援助により設立され、次のような組織で養豚の基礎研究活動を行っている。行政室・遺伝系・病理系・生理系・栄養系・肉品質系・環境行為系・教育推广・種改良中心の九部門からなっている。
- 二、台糖公司畜産研究所：応用研究および生産を主目的に種豚二〇〇頭の一貫生産で年間五〇〇〇〇頭肉豚出荷をしている。なお豚のデータ管理は電腦(コンピューター)によっている。

九、台湾省畜産試験所(新化)：六五〇町歩(才2次大戰前には一〇〇〇町歩)あり、養豚系、家禽系、畜産

加工系、山坡地畜牧・養牛系、飼料作物系、家畜栄養系、家畜人工授精センターがある。見学は産肉能力検定豚舎、奇面豚、分析室、人工授精器具、そしてメタンガス発生装置、発電、給湯装置などであった。

十、立大農畜興業股份有限公司(高雄県路竹)：飼料工場月産一二〇〇〇t〜一五〇〇〇t、養豚種母豚五〇〇〇頭で年間七七八〇、〇〇〇頭の肉豚を出荷、そして肉加工(アメリカ式屠殺場)では一時間に一五〇頭処理(屠殺・解体)をする。一貫大規模経営を行っている。

三日間で一〇カ所を見学したので充分な知識は得られなかったが整理すると、

台湾は九州とほぼ同じ面積を有し、人口一六〇〇万人であり、豚の頭数は三八〇万頭のうち肉豚五三万頭分は日本に、その他子豚を香港に輸出している。したがって養豚は栄々である。

基礎研究と指導者養成は大学と養猪科学研究所そして台糖公司畜産研究所が行ない、農家指導は畜産試験所関係で実施している。なお台糖公司だけで年間五〇万頭の

肉豚と肉牛六〇〇〇頭を生産している。

養豚の歴史の古い国であるから農家の人々も大変熱心である。しかし現在はアメリカ式の飼育法が主に取り入れられている。

品種はラントレース、大ヨークシャー、デュロックが主力で他にパークシャー、ハンプシャーで在来豚の桃園種や奇面豚は試験所で飼養している二〇頭前後であった。改良方面ではハイブリッド豚の配布を考えているようだ。

産子数はどこの養豚場もすばらしくほとんど一〇頭以上哺乳していた。なお人工授精も栄んで現在二八%も実施されている。日本ではせいぜい一〇万頭程度である。

飼料はアメリカより輸入しているので完配が主力で試験所等で甘藷づるの改良（蛋白の高いもの）等を行なっている。

糞尿処理については亜熱帯で作物の成育が早いので有機質肥料として最大限利用されている。その他メタンガスの発生装置の利用による給湯や発電も研究している。又養魚にエサとしての利用が行なわれ、いわゆる糞尿処理施設（機械的処理）は皆無に等しかった。

家畜市場では屠殺前の一〇〇Kg前後の取引が中心で、いわゆる生体取引である。セリは昼間行なわれ、夜間に

屠殺され翌朝店頭で小売される方法である。したがって

凍結されない生のままで販売されている。しかし若干ではあるが一部の地域では昼間屠殺、夜間凍結そして翌日小売というように行なわれ、将来はこの方向で実施されるより改善するとの事であった。

経営規模については、養豚農家三一万戸、飼養頭三〇万頭、規模別では五〇頭以下飼養は三〇万戸、五〇頭一〇〇頭五〇〇〇戸、一〇〇頭一〇〇頭二七〇〇戸、二〇〇頭一五〇〇頭一五〇〇戸、五〇〇頭一〇〇〇頭二四五戸、一〇〇〇頭以上一四七戸、で将来一〇〇〇頭以上の飼養農家はおさえ、複合経営の一貫生産で種母豚五一六頭、肉豚五〇頭で農・畜・魚の複合経営を目標している。

衛生：豚コレラその他日本と学術・技術の交流が栄んに行なわれている。又飼料添加剤も検討している。

以上概要について記したが、今回は才一回の研究会議でもあり、今後の研究会議では細部にわたって討議が行なわれるものと期待し増々交流が栄んになる事を希望する。

最後に中華民国政府の盛大な歓迎に感謝し、養豚関係者の多数の参加を期待します。

特集

1

魚粉に代る動物性

蛋白源について

畜産三年 豚 々 豚 麩

最近、二百海里の影響で魚粕の高騰が目立ってきた。海は、「海洋自由」の原則をかかげて沿岸から沖合、沖合から遠洋と漁場を広げていった無資源国日本にとっては、残された比較的自由な領域だった。だが、今「漁業資源の確保」と「海の領有意識」の進展とともに世界の海域から追われ、追われないまでも高い対価を要求されている。

わが国の飼料用魚粉総使用量は約六十八万ト水準です。この魚粉も、今まで原料となってきた一部の魚も人間サマに消費されることが十分考えられます。

今後このような魚粉需給関係の不安定要因に対し、飼料メーカーならびに畜産家の対応策として、①魚粉配合割合の減少、②魚粉以外の動物性蛋白ミールのよる代替③植物性油脂による代替 ④合成アミノ酸の利用促進

⑤海外における魚粉資源開発ならびに買付促進 ⑥未利用資源開発と利用促進などが想定される。

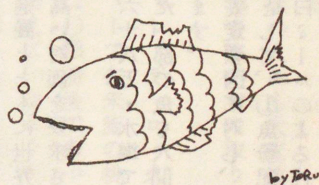
飼料用動物性蛋白源としては魚粉、フィッシュ・ソリュブル、乳製品副産物（脱脂粉乳・ホエイなど）、家禽家畜副産物粉（ミート・ボーン・ミール）や骨粉・血粉など、その種類は多岐にわたっておりおの栄養価も異なる。

そのうち、家禽家畜副産物粉であるミート・ボーン・ミールなどの栄養価とその利用については今までに多くの成績が発表されており、飼料要求率や畜産物の品質に要影響を及ぼすことなく、魚粉あるいは、大豆粕の一部を代替できることがわかっている。

たとえば、ミート・ボーン・ミールは肥育豚の増体効率に悪影響を及ぼすことなく蛋白質給源として大豆粕二分の一から三分の一の代替が可能であるという米国ミネソタ大の研究報告もある。またミート・ボーン・ミールはトリプトファン含量が少なくこの原料の使用に際してはその欠乏を補う配慮が必要である。

すべての飼料原料に対していえることですが、飼料を上手に使うにはその特性をよく知って適切に利用することです。とくに蛋白源については蛋白含量、可消化蛋白質、アミノ酸組成、ミネラルやビタミン含量などに、十分留意することが重要です。これらの利用に際しては、家畜の要求量に対して不足しやすいアミノ酸あるいはビタミンなどを添加することの必要が生じることもあります。

配合飼料中の栄養素が要求率のすべてを満たす限り、魚粉は不可欠ではなく、飼料原価に及ぼす効果により判断されるものと思います。ややもすれば魚粉を除く動物蛋白源についてはイメージにとらわれ、本来の価値や効果を忘れがちです。とくに家畜家禽副産物粉の合理的な利用は、有効な蛋白源の開発および確保という見地からも有意義であると思われれます。



おいしいミルクの搾り方

畜産二年 所 賀 雄 大

牛舎にズラリと並んだグラマーで、それでいて繊細な乳牛達、彼女達に欲情するようになればテクニクはともかくとして、酪農家としては、一人前であろうと考えます。ジャージーなんかの、あのシャドトもきまっと大きな腫で見つめられたりしたら、もうダメ、たまりません。そしてまた、彼女達の豊かな乳房によだれ流してほ

おずりして、それでこそ男なのではないでしょうか。酪農家を目指している方で感じない方は多分俗にいう、インボというやつでしょう。確か、マムシドリは二百円也でしたっけ。小田急の売店で、売っています。まあ、ここまでは余談であります。さて本論「おいしいミルクの搾り方」について述べてみたいと思います。ここでいう「おいしいミルク」とは加工前の状態で、できるだけ衛生的である事、脂肪率が高い事、そして、たっぷり搾れる、すなわち乳量が多いという事も条件に含まれているものであります。

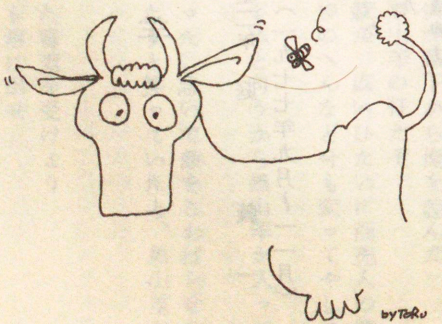
まづ、その為には搾乳の生理について知らねばなりません。つまりミルク・イジェクションであります。これについては畜産学概論を見ていただくとして、省略いたします。(なお、これは一年次の概論の試験におけるヤマとなりますので、現一年生、および再試験の方は必ず参照下さい。)次に搾乳時の牛達の気持ちについて考えてみましょう。搾乳の生理は乳頭への刺激により始まります。自然条件においては、この刺激は仔牛によって与えられるのです。つまり母牛は仔牛に乳を飲ませたいためにミルクを出すわけです。ゆえに、搾乳者は自分が仔牛になったつもりで「お母さん……」と心の中で思いつつ、作業に入ると良いでしょう。できれば、作業服も白のつなぎに黒い斑紋でも書いたものを着こめば、文句なしなのです。また牛達は、あの身体に似合わず非常に神経質であります。搾乳は条件反射で行なわれるもので

すから、毎日定時に規則正しく行なう事が大切です。その際もなるべく驚ろかせたりしないよう、優しく声をかけて接するように心がけましょう。搾乳前は決して手を上げてはいけません。その一撃で、彼女はショックにおち入り、乳を出すのをしぶったりする事もままあるのです。あるデータによれば、搾乳時に静かな音楽を聞かせると乳量が六%アップしたそうです。豪古放浪歌でもうなりながら、のどに自信のある方は搾ってみたらどうでしょうか。このように牛達の気持ちを知り、大切にしている事は非常に重要であります。

さて、いよいよこれからが、その実際であります。ここではそのいろいろある方法のうち、一般的なミルクカーによる搾乳について述べてみたいと思います。まず、乳房をよく洗う事。40℃/50℃の温湯で一/二分のマッサージを与えてやります。それによって、乳頭を刺激し、乳房に付着しているゴミ、汚れなどを除去する事にもなるのです。すると、その後一五秒/二分の間に乳房内圧が最高になり、その時をのがさず搾乳の開始ですが、できれば最初の二、三搾りは手で行ない捨てるようにして下さい。これが前搾りであり、いわゆる捨搾りといわれるものです。ミルクの成分は搾り始めから終わりまででは、ずいぶんの差異があり、細菌数は搾り始めで六五〇〇、最後では八〇〇(ミルク二五g中)とあとになる程少なくなっています。また、乳脂率についてはみてみると、逆に搾り始めから終わりまでは一、四% / 八、七%

までとだんだん高くなっています。そして、また前搾りを行なう事は括約筋をゆるめ、乳の出を良くし、しいては個体管理にもつながるわけです。その捨搾りが、いたましいと思う方は、そのミルクを仔牛の育成に使ってみてもいいし、また御自身で飲んでみて、いかに細菌が多いかを実証して、お祭り騒ぎを楽しんでみるのもいいでしょう。

次に、ミルクカーの装着です。ティート・カップを装着する際には、空気をなるべく吸わないように、すばやく後乳房から取り付け、クローを前下方に引張るように、ミルク・チューブを正中線に位置します。これは乳房を前乳区と後乳区にわけた場合、後乳房の方が六・四の割合で乳量が多いからであります。そして、そのままの状態では搾りつづけるわけですが、乳房内の残乳が少なくなってきたら、乳房がしぼみだすと、ティート・カップがせり上がってきて、その圧力でかえって今度は、乳の出が



悪くなるようになります。この状態をクリーピング・アップといひ、ティート・カップをクリーピング・アップさせないためには、クローを手で押し下げ、乳頭をひっぱってやる操作、マシン・ストリップングを行ないます。前述のように、最後のミルクは、たいへん乳質も良く、残乳がある事は、乳房炎の原因ともなるので、後搾りはしっかりと行なわねばなりません。手でマッサージを行ないながら、マシン・ストリップングを三〇秒一分ていねいに行ない、できるだけ、ミルクのみで搾り切るくせをつけるように。後搾りを手だけによって行なう事は、能率の上からも良い事ではありません。ここで、後搾りの際の残乳量の確認ですが、熟練すれば、手で乳房を触った感触でわかるそうですが、そうなるまえの、基準の一例として、ミルクホースを流れるミルクが二回に一回、パケット内に流れなくなるまで搾りきれば良いとされています。

さて、みなさんには、おいしいミルクが搾れたでしょう。搾乳は酪農家にとって、一番大事な作業であり、そして、牛達への愛情が最も結果となって表われる作業であります。自分で搾ったおいしいミルクを、ぜひ御賞味下さい。そして、それが、我が畜産学科の明日への力となることを、とみに望んでいる次第です。



黒山羊

畜産二年 庭 義 一

(一九七七年九月―十二月)

はじめに

単音の調べを書きたかった

かけるものなら、だった

そしてどうだ俺の弱い精神は

それゆえに奇型児を産んだ

そいつは大いに俺を失望させたが

俺は捨てられなかった

否、よそう！ いいわけはしたくない。

俺は素直に認めた

ここが俺のかけた限界だったということ。

第一部

狂気の疾走が駆け抜けた

汗は膚に喰いついた

そんな運命づけられた日だった
俺が黒山羊と会ったのは未だ学生になってまもない頃
だった

奴はジロリと暗い眼で一度にらみつけると黙々と草を
喰んだ

なんと陰気な山羊だったろう

そして、なんと地獄色の黒だろう

地獄の三ツ首犬も、かくも黒くもなからうに

汚れた硬い瓜で地面から、ツ立っているのか

ただれた眼で何も見えるものなどない

角は破れ、髄には虫が喰いついている

そんな角など誰がもらい下げれるものか

山羊よ 黒山羊よ

風化したがらんだりの割板よ

風は北にかわれ、地の果ての方向に

地面に棲みついたケチな小悪魔共は

地の淵に投げ捨てる

憎悪と破裂の権化の黒山羊奴

貴様の崩壊は、貴様自身の眼の中だ

黒い線と白濁との白眼の交差

お前の喰いついたピストルは本物だろうと

お前の内面などは、崩れ崩れの大破産だ
絶望に甘えなかったのはほめてもやろう
残るものなど何もない大崩壊を続けて

真実などを信ずる由もなし

違った！ 真実、愛、信仰その他全てが

自爆の中にひきづりこまれたのだ

十九歳で破滅を書けなくなった

黒山羊よ

過ぎることは世間に取って毒でしかなかった。

屋下がり片田舎の長屋の一角に俺は立ち停った

お茶が出て不気元な子供が廊下から俺を睨んだ

ちびめ、確かにお前は黒山羊の仔だぞ

小利功な顔にしても無駄だ、広いひたいに商売人の眼

をぶらさげて、濃いまゆのへんなど今も変ってやしま

い

茶が飲みおわった、ひょいと向うから黒山羊が入って

来た

にたりと黒山羊がわらった、急いで顔をこわばらせた

がそれでも俺の顔はにたりと笑っていたと、黒山羊の

妻が言った

黒山羊よ、お前の盛った毒盃を受けよう

泥の酒を飲む、魂も肉も溶け出せ

なにも見たくはない、哀しい、そう書けば

甘い砂糖菓子の味がするだけさ
動け動け 風にまかせて転がり走り出せ
動乱こそ俺の心だ

悪魔はかがり火の囲りで踊る、みる 奴らの毛むくじ
やらの毛並を、たぎる地獄の窯の音がする
やい三ツ首犬、お前の肉はうまいか
焼かれた肉の死臭 地獄の鳥は白い眼だ
白子の悲綿が引き裂かれる

黒山羊奴

哭くな そんなに故里が恋しいか
草木一本植えやしない荒野に もどってみたってしよ
うがあるまい

あの地でお前は何を喰って来たのか
暗雲の下から したたった雨水か
それとも迷った隊商の肉でもねぶって来たか
哀しい眼をするな

世間が嫌いなのは俺も賛成だ

豚共め、死肉を喰らうハイエナよりもいやしいけども
のらめ

デーモンの仔の貴様だもの
澄んだ星座をひきずりおとすのだ

情念が燃える 暗い海に不知火が燃える
不知火は極寒の海にまたたく

れるのをさけて私は冷えてしまった紅茶を飲んでみた、
乾燥した空気の流れが私ののをかすめていったそんな
なにかい味がした。

捨て来た、人間というものが全て内部から崩れに崩れ
てゆく。

気がつけば地獄の淵を心に持ってしまった。

出発(たびだち)が終末を背負い込んだ様だ

この大崩壊を止める手だてなどあるうはづがない
運命に喰いつこうが果てないアリ地獄よ

虚無になるな、虚無になる程甘くはない、大崩壊は口
をあけた。

人も通らぬ地味な山岳は白い悪魔が口をあぐり空け
ている。

道は作られるが白い谷底から大きな手はのび、一年の
ちに道は中途でなくなる。

霧の深い日には、ほろりと登山者が高瀬の淵まで落ち
てゆくと言う。

谷のむこうはまた深い谷が落ちている、あれは黒部谷
その源流は魑魅魍魎の棲み家と聞いた、三俣の親父の
本だった。

今も風が荒れる、霧が深くなる、人間の足音が聞けな
くなくなった

お前の眼だ

完全な神などありはしない

誰れの胸の内を知りつくしている様な化物は真平らだ
悪い人の仔に嫌みつく地などは、はなから無かった

神々の崩壊、その荒らしい地上に何かが

育まれるだろう？

カオスとコスモスの灌がれた黒山羊の小舎が
たつだろう！

第二部

風が吹いた

黒いものが地に墮ちた
ただ、それだけの不気味

女が話す、黙ってりなずく、暗い過去がヌラヌラと女
の唇から流れ出た。女と言っても未だ子供の唇をして
いた。それに真赤な紅が付いている、暗い眼を喫茶店
の木壁にもたせていた。ドロ人形の瞳が暗い闇の奥で
チカチカ見える事があった。その時だけ人間らしかつ
た、そのときだけ人間らしかった。

ぼってりと大気味の身体の曲線が年と不釣合のなめ
かましい色気をにじませていた、女が「田舎の温泉場
で水商売をしていたの知ってる」と言った。見透かさ

黒山羊が俺に言った事がある。いや、それは奴の独り
言だったか、忘れた。自分が不幸になると思ってもそ
れを選ぶのは悪い事じゃない。その言葉が本当によく
わかるわけではないが、その言葉をはいた奴をその時
は理解できなかったが、奴が今の俺ならやはりそうゆ
う言葉をはいたろう、俺はそんな気がした。

俺が黒山羊と決別したのは奴が群れの頭にけんかを吹
っかけたのが原因だった。元元奴だっけんか好きの
黒山羊ではなかった。奴を変えたのは奴の血の汚れと
も聞いた。

また群れの頭が黒山羊を受け入れなかった為共聞いた。
奴がけんか好きになったのだから、奴としてみれば、
その時には生々とした眼を持ってたからだろう。そして
黒山羊は死んだ。奴は頭外骨を割られた。墓穴は山羊
小屋の前につくられた。

ダンボールの黒い燃えがらの散乱する空地が奴の死場
所とは今に誰も知らなくなるだろう。

そしてそれからだ、俺の中に奴をみつつけ、他人の内
側に影を知る様になったのは。それからは奴は突然俺
に直に話す様になった。

風は吹く 空気の潮流

知ることには 知らない事だと

人間の心象程 言葉で表わせるものじゃない
気付かない事は 良い事だと言った事がある

苦しみを知る必要はないと言った事がある
何が有る?! 有るのか! 知りたくない
誰もだ、人のみにくさを、気性の荒いものは、
小心苦だろう。その気性に気付いたものは
すでに老いている。

深い深い穴がある
喜怒哀楽のその中に 心の中に穴がある
人間と人間が呼ばれる その前から
ひそかに空いた穴がある

その穴をのぞいたものは 楽楽と
たのしむことはできない その穴は
そのかなしみを 買りものにする程甘くない
穴は喰いものにされればされる程
外道は穴に馬鹿にされるのだ。
人間をかんたんに言い切る程の
馬鹿になり下がることは 人間の生活をやめる事だろ
うよ。

何が有るうか 知らぬ
ただそれだけを 知らないことを
知りつづけることが大事だ

それまで俺は餓えていよう。

俺は捨てていた

—だが—

しかしその昔、俺の大部分を占めた

—分身であったことを素直にみとめよう。

汚れた甘さに俺は住むことはできない。
全ては感性の嵐をぬけてきたものがのみ持つ資格
それは完全な滅菌の世界 悔澁の外界
俺は生きよう。
どこへ。
ふくろこうじから異次元にぬけた人々のもとので。

光 陰

畜産三年 小林 庄市

今日風日好
秋風笑於人
愚夫同瓦石
無事坐悲苦

明日恐不如
何乃愁自居
有才知卷舒
塊然涸轍魚

おお、地獄の道は続く
黒山羊よ、燃えて妖星として焦熱の邦に
我が身を投げ入れたお前の魂は
今俺の腕の中で激しく首をふる
幾つかの火羽がはきだされ
俺の精神は熱くなる

いつの日か—それを俺は夢みている—。
俺の感性最大に吸収された黒山羊の思想が
沈黙の分析として始まることを。

エピソードという題の出發

— J・N・A・R に告ぐ —

黒山羊よ

これはお前の言葉だ

「誤った道をすすむことは悪いことじゃない」
それは地獄をみる思想と俺は直感した。

放いつなお前の行動を
繩なんぞでとめることはきかぬ
地獄の彼方のふくろこうじに
お前の死が手を振る

—黒山羊よ—
お前の中に存在した嵐の感性を

只今 自殺中につき

クリメン・アモリス

(一九七七年一月九日)

俺は自殺中の身だと思っている。それは他殺ともいえ
る。
しかし、自ら進んで殺ねばやはり自殺であろう。
亡者が道を歩いてゆけば薄気味の悪いものだが、亡者
自身から言えば、死んで死にされるものでないからそ
うやって歩くのだろう。
それも肉親に殺されたら、うらみはもっと深くなるの
だ。俺は未だ生還の入口を探しあてていない。この絶
望を知らせてもなになるわけではない。いわば亡者
のたわごと、と言えようか。
たとえばだ、恋歌という題の詩を俺と加害者が書きな
らべたとする。

俺の詩

恋歌

おまえのあたたかいうでにまかれて
たのしいやすらぎの中にしづんでゆく
その時、時間はかかれ
お前の汗ばんだ臭いがしめやかに僕の鼻をくすぐる
白い脂の含んだお前だから僕は僕の親指をつつみこん

でしましう

突然、お前の口から流れ出た水蒸気の群に

お前の耳もとにいた僕の髪はぬれてしましう

僕はお前の澄んだとまどいの瞳を僕の唇で押し殺す

しづかにお前の四肢は開られる

お前の陰花植物の花びらが 無音の内に開きだし

静かに呼吸をはじめ

なだらかな起伏に唇を押しあて 段々にそれを押しあ

げ

お前のうちがわから強くゆすってやる

やがて海鳴りのようにわななきはじめたお前の身体を

私の胸に針づけて 確っかりと結んだ掌はそのままた

時間の彼方へとびたってゆく

俺の詩なんてだいたいこんなものだ。要するに内面に

厚みのない理知より抒情の先行する軽薄な、テープレ

コードのように誰れでも簡単に写しとれる代物でしか

ない。本質はまねのできないものだが、本質自体の存

在しない詩は模写するのは実に造作のないものだ。

加害者の詩

恋歌

ああお嬢さんわたくしに乳房をください

それよりもお尻をください

今宵労働者たちも

切りとった女の脚を抱きしめて

しゃぶっております

健啖健啖

ただれたアスファルトをころげまわり

臭いところを向けて

お嬢さん

わたくしにお尻を！

電車のように赤い腸をくねらせ

おお

暴発するあなたは美しい

赤い毛をふり乱し

ああ

そんなところにも毛をはやし

あなたは生きてこられた

豚よりも犬よりも

可愛いあなた

とぐるまくうんこの海を泳ぎ

のたうつ腸をひきづるあなた

ああ

誰れよりもあけっぴろげである

ああこれ別のお嬢さん

ワックスのお尻を！

何よりも

わたくしに

暴発するお尻を！

無限に広大な宇宙。

無限に存在する時間。

この中で、このおれが生きている一瞬。

このおれが呼吸をし、

このおれの心臓が一回鼓動する。

無限の世界の中の、この一瞬、この一瞬、この一瞬……

……

原始時代、クロマニヨン人が呼吸を一回し、クロマニ

ヨン人の心臓が一回鼓動した。

その一瞬と、今、現実にある、この一瞬と、どこが違

うというのか、違いはすがない。

夜空に見える星の光。

あの光は闇につつまれた暗黒の世界のかなたから、何

十年、何百年かけて、今、存在する。

考えれば、考えるほど無限である。

でも、おれは生きている。

今、生きている。

現に、おれは生きている。

おれの心臓は強く動き、

体の中に、血液がみなぎっている。

おれは生きている。

現に、おれは生きている。

無限に広く、闇につつまれた宇宙で……。

俺は、読む度に腹わたにしみこんで冷えたある感覚が
もたらされるのを感じる。もうどちらが新鮮であるか
は直感によってお解りいただけだと思います。素朴な
直感程、ものごとをはっきりさせるものはない。
それは表現力の差とか、構成かとかいうものではない。
ひとつの人間の地力が他の人間の地力より勝っていた
という結果に他ならない。
判逆とか逃走というものは、その罪の意識の強さとか
戦いを挑む意識の程度によって、その価値が決まる。
それには解りにくい言端かも知れないが、ただの人間
であることが必要だ。言い換えれば野性とも言えよう。

おのれ 自分を思う

ひら じよ けん しゆり
平 良 元 秋

宇宙、闇につつまれた暗黒の世界。

この宇宙の一つの点にしかすぎない地球、

この地球の全ての生き物の一つであるおれ、このおれ

がいなくても、この宇宙がどう変わるといふんだ。

この地球が消滅しても、この宇宙がどう変わるといふ

んだ。

風まかせ

畜産二年 所 賀 雄 大

朝に街をめぐるなら
風にまかせて行きましょう。

追い風、微笑みかけるなら
タンポポのお酒、のみほして
千鳥足もあやうげに
風のすみかをさがします。

そして……

昨日の香りを感じたら
東のキャンパス取りだして
ひまわりの陽を描きます。

今日はどこまでまいろうか。

夕に街をめぐるなら
風にまかせて行きましょう。

向い風、涙はこぶなら
リンゴの匂いを身にまとい

ため息ひとつはきすてて
風色涙をもらいます。

そして……

つのぶえ崖まで歩いたら
西のキャンパス取りだして
夕焼け色を描きます。

明日はどこまでまいろうか。

遠くどこかで

遠くどこかで

タイコの音がいたします。

遠くどこかで

花火の上がる音がいたします。

私はまだ、お祭りの夜

ゆかたを着た事がないので

今度、貴方がさそってくれるなら

白い素足を

随想

我が収穫祭回顧録

畜産四年 杉 山 康 雄

今思えば、随分とムチャをやった様に思う。

収穫祭、この名は一見、華やかな響きをもつようだが、それを裏で行なういわば裏方さんというところ、一言でいい表わされる言葉が浮かばないくらい大変である。

まず順序だてて説明しよう。

我が畜産学科には幸か不幸かわからないが畜友会なるものがあり、この組織を運営する人が主に、その裏方さんになるものが多い。もちろんその他の好き者がいないではないが。

まず裏方の仕事というところ、収穫祭本部から依頼される北門装飾がある。これを読む人は「ああ、あれか」と思っている事と思うが、これが大変な代物で、その説明はあとまわしにしよう。それから前夜祭、特別企画、文化展等の事務処理や運営、それから最後のフィナーレを飾る体育祭運営である。そして忘れてはならない物として、宣伝ストームへの参加となるわけである。その他いろいろ

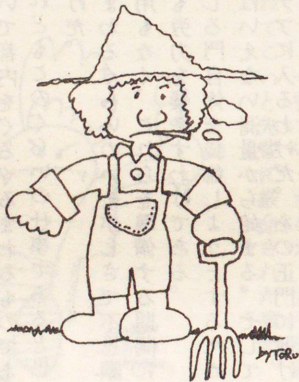
速く流れる笛の音こえて
そっとふみ入れてみたいと思います。

遠くどこかで
タイコの音がいたします。

遠くどこかで

大好きな少女達の

笑い声がいたします。



いる細々とした事務的なものがあるという事をつけ加えよう。

宣伝ストームなどは読んで字のごとく宣伝であり、我が畜産学科は、意外と粋なハッピを着込んで張り子の鶏のみこしをかついで都内をぐるぐるまわるものである。まあザツとだけけれどもこのぐらゐの仕事であると思ってくればいいわけだ。

とにかく目がまわるぐらゐのいそがしさで不思議と期間中はたいした用もなく、これらを準備する期間に、肉体的・精神的にも労力を費やすわけである。

北門装飾は何しろ門自体を装飾しようとするためにおせじにも厳密とはいえない測量から始まる。そしてそれが終わるとアイデアに入るわけだ。あの正門に敗けず劣らずという気持でスタートするわけだから、いろんな所から写真やらさし絵やらをひっぱり出してきて外装を決め、決めたら実際に作成段階、もうこの段階になると決められた期日までに作り上げるために夜もおしんで行なうわけで、かといって昼間もやるのかといえばノーである。我が畜産学科は何事においてもへんな秘密主義みたいなものがあり、決して昼間はやらずに、ただただ要求を満たす、つまり力を入れて寝るわけである。

私は実際に一年の時にその北門装飾なるものを作る兵隊、いわば使っちゃしりであるがやったわけだ。夜間作るわけだから当然昼間は寝るわけだ。夜間作る時々思ったもので「何しに学校に来るのだらう」って

まいノシノシ歩く感じでどうしようもなかったと思う。内股だけならいいが、眉毛・スネ毛をそれと言われどにかスネ毛だけは許してもらったんだが、どこから見つけてきたかわからないが使ったあとがわかる、女性用下着をつけさせられた時などは、恥かしいやらさけないやらで。眉毛は当然全部そられたわけで、収穫祭が終わると同時に生えてくるわけもなく、毎日鏡でにらめっこをしたものだった。

収穫祭といえば酒で、これがもうどう表現していいかわからない程であり、毎日の主食といえば酒に、例のラーメン。酒を飲みすぎてそれにまつわる話は数えきれない程だ。

今おもしろいおこして、一番まいったのが、女子寮に忍び込み下着をかすねてこいと先輩に厳命された事だ。あの頃は先輩の言葉は絶大なもので

泣き泣き承知したのだが、途中で見つかった時の屈辱的な事を考え、途中でひきかえし、行



ね。まあ一様設計図らしきものはあったが、やっているうちにどんどん変わってゆき、最後の方は自分の感に頼ってかなづちは打ったものだった。

もちろん夜やるわけだから、当然腹がすく。現在でも期間中は出ているが屋台のラーメン、あれがいわば夜食みたいなもので、あまり美味であるとはいえないが、よく食べに行ったものだった。このラーメン屋には生のすったニンニクが置いてあって、これをめんが見えなくなるまでかけて食べるために口の中たるものや、ものすごく、朝そろそろ人が学校へ来るころに、女性専用で、特に美人のみを狙って前に行き思いきり息を吹きかけ、朝の挨拶をしたものであった。まあやられた女性には十中八九、べそをかきながら、なにかきたないものを見る眼で走りさるわけだ。これがおかしくよく先輩にけしかけられてよせばいいものをやったものだ。

口の中の臭いがニンニクの臭いだけではなく、酒の臭いも混じるものだから、自分でも気分が悪くなるくらいである。この一種異様な臭いを自分では一種の勲章の様なものであると思ひ込み、誇りの様に考えていたようだ。今思えば馬鹿馬鹿しく思うのだが。

私が一年の時とはとにかく裏方をやる好き者がすくなく一人何役という事があたりまえの様で、いろいろやらされたものだ。収穫祭中に行なわれる出し物では女形専門で、女になりきるために普段から内股で歩く練習をさせられたおほえがある。まあ本番ではすっかりあがってし

ってきましたと先輩に報告した時の情なさたらなく、穴があったら入りたい気持だった。

二年になるといくらか発言力は増したが、一年の時と同様、兵隊であるという地位はぬけ出す事ができず、体育祭を担当させられたのであった。

これはもう脚力、腕力とに自信のあるものを捜し出す事から始めるわけだ。

次に櫓装飾なるものを作成するわけだ。その他に、仮装行列やら事務応援団やら、なにかと忙がしいが、私は櫓装飾に力を入れ、その他はさあと流すつもりでいたが、もう応援団にいたって体育祭が始まり、その日の午後じやと造動作、いわゆる手ぶりなどができ上がったというしるもので。

櫓装飾なるもののアイデアたるものや、それこそこれしかないしと決めこみ作ったわけだが、そのアイデアというところと竜が城をぐるぐるまきつけているという具合だ。竜の頭と尾っぽは張り子で別に作り、ベニア板に城の絵を描き、その上に、わたで竜の胴体を作るわけだが。頭というところはライトでピカピカ光り、口はバクバク開き、その上から火を吹くというしかけで……。意外とアイデアは最高でも、いざ火を吹くという段になりその火が全体に燃え広がってしまい、もうあわてた。あわてて、そこらじゅうから消火器を集め、消火にあたっていたけど、時すでに遅く櫓装飾がほとんどやけてしまい、あの時の虚しさ、悲しさといったらなく。一諸にその櫓を作

った相棒と男泣きに泣き、本当に涙が出てしようがなかった。あ、そうそう、その相棒とは一諸に作成にあたったために、寝る時も、食事する時も、おまけに、トイレに行く時もずっと一諸。収穫祭が終わった時などは本当に実感として、「こいつの顔を見ずに済む」と思った程、見事にいつも一諸だった。

その樽装飾がその火のおかけかどうかわからないが見事に優勝を飾った時などは、もう、天と地がひっくりかえりそうなほどうれしかったね。これが泣けずにおられずかという程うれしく、表彰状をもらう時はもう顔はくしゃくしゃ、鼻水は垂れるやらで、それはもうたいへんという感じであった。

あの時の気持はいまでも不思議と覚えていて、収穫祭といったらあの時の感動しかないぐらいだ。

その時はもう酒は死ぬほど飲み、そこらじゅう飛びまわり、ああ、やって良かったと思っただけだ。

その時の夢をもう一度と三年になると、本当に裏方の兵隊は卒業し、その権力たるや絶大なものにならなければいけないのに、なぜか、そうではなく、その兵隊が、なぜかダメ人間ばかり集まってしまい、私は天に向かつて言ったものだ。

「ああ天は我らを見はなした」とね。それでもダメはダメなりにやるもので、夢はもう一度とまではいかなくなっただけどうにか私の面目は立ったとおもっている。なぜか三年の時は強烈な思い出はなく、ああ終わったとい

手紙のある世界

畜産一年 山 中 鹿之介

う安心感で満ちていた様に思う。ああ来年一年で収穫祭も最後かと思うとなぜか気分的に寂寥としたものだ。四年になった時は、もう今年が最後だと思いと、気分的には最悪で、完全に裏方から足を洗い、傍観者という立場になってしまい、何もできずに終わってしまった。ああこれで終わったんだと思うと無性にさみしさが渡来し、また来年よりという気持ちになるから不思議である。

これで私の収穫祭は終わったんだという実感である。四年間、私は収穫祭の裏方として自分なりに頑張った。ああ、農大生なんだ」という気が初めてした様に思う。最後に言いたい、我が収穫祭に悔いはなしと。

「コミニケーションに飢えている現代人」
人は常にコミニケーションの相手を求めている。語り合う人間を身近かに見出し得ないとき、人は動物と語り、自然とも語って来た。目に触れるもの全てがコミニケーションの対象となる。しかしながら、人間が人間と語り合えなく成った事、よほどの強固な意志の持ち主でない

限り、深い孤独の思いにとらわれるに違いない。

犬や猫と語る事で寂しさを紛らわしたり、テレビを見て昼の一時を楽しんでいる主婦にしても、やがては愛する夫や子供が元気に帰宅する事を、当然の理としているからこそ、孤独の影を感じないで済むのである。それにして現代人はコミニケーションに飢えている。

「消えていく対話の場」

では、現代人は本当に「対話」を失ってしまったているのであるか。親子・友人・近所の人達・仕事仲間……の間で対話を求める声、今日程強く聞こえる時代はない。現代は対話喪失の時代と成ってしまったのか。

以前に比べて、現代では本当に対話が乏しいと云う明確な証拠は……。しかしながら、実際には誰にも持ち合わせて居ないのである。にもかかわらず、多くの人達がそう信じているのは何故である。コミニケーションの断絶が語られ、又、その危惧が論じられている現代は、何が欠けているに違いない。

色々な理由をあげる事が出来るがその一つに、話し合う事の楽しさがひしひしと感じられる様な「場」が都市化の急速な進展のもとで、生活の中から次々と消えていったと云う事情をあげることが出来る。

茶の間での家族の語り、火じる端での談合、井戸端会議、床屋談議など、おしゃべりの機会の痕跡が折に触れて語られて来た。それらは、日本人のコミニケーションの「場」を象徴していたのであった。現代は対話の象

徴的な場が、生活の中から一つ一つ消えてしまっている時代である。

「私はいったい誰なのか」

より重要な点は、現代では人々が自分がいったい誰であるのかをはっきり見定める事が困難であるのかについて、自分自身に納得させる機会と場所を家庭を始め、社会の到る所で見出すのが、非常に困難な状態に立たされてしまっている。

コミニケーションの飢餓感、現代人の「私はいったい誰なのか？」と云う、真摯な問いかけを示しているのではないか。自己確認の欲求として現われる、自分はこう思う、こう考えたと云う事を、他人に知ってもらいたいと云う欲求である。

第二に、自己表現の欲求となって現われる、イエス・ノーあるいは、○・×で示すのではなく、自分の言葉を用いて自分の気持を具体的に、他人に示したいと云う欲求である。現代人は、思いっきり心の微妙なひだを、そのまま相手に伝えたいと云う願いで一杯である。

「自分を語ると云う事」

自分について正しく語る為には、自分を忠実に観察する事から始めなければならない。自己主張と自己表現には冷静な眼による自己観察と、相手に対する深くかつ温かい思いやりが必要である。この作業は一朝一夕にして会得出来るものではないが、誰でもその人なりに達人と成る事の出来るものである。その秘訣は自分を飾らず

に、素直に相手に示す事である。

コミュニケーションへの飢餓感、しゃべる事によって癒されると一盤には信じられている。確かにそうだが、しかし決定的なポイントがそこには欠けている。自己確認の作業が自己観察と相手への思いやりによって成立するとしたら、人間は口でしゃべるだけでなく、書くこと云うもう一つの貴重な人間の武器に慣れなければならぬ。

「書く事の大切さ」
現代人は余りにも書くこと云う作業を忘れてしまっているのではないだろうか。日記を付ける、手紙を認(したた)める、文章を書く事など我々は忙しさに紛れてついペンを敬遠しがちである。

だが、「私はいったい誰なのか」と云う問いかけに対して、自分に最も相心しい回答を出そうとしたら、我々は他人とおしゃべりする楽しさを味う努力と共に、書く事を通して語る事の難しさを、その結果として得られる大なる喜びを、もっともっと求めて良いのではないのだろうか。



ちよつくら考え御覧じろ

畜産二年 東 農 大 児

大多数の平均的な日本の家庭は権威有るおやじはいなくなり、家庭は慈い場に成り、おやじがリラックスする場所になったわけである。お父さんのだらしない所をお母さんがいつも見ている、子供の前でお父さんの様に成るなど言い、その為一生懸命学歴を付けてやるうなんて云う所で出来たのが所謂教育ママ。教育ママの関心は、自分の子供をこう云うふうに育てたいとの理想もないのに、ただ学校の成績の良い子供にしたい事。学校を支配している価値観と家庭を支配している価値観とが、一緒になってしまった。昔だったら、特に女の子の場合などは学校の成績が悪くても、家の事を良く手助けする子供とか、素直な子供の場合などは、お前は大変良い子なんだと云う事で救われる。けれども今は同じ価値観に成っているから、息つく場所も無いし、放課後遊ぶ場所なども無くなり塾にやられる。塾でも同じ価値観でしごかれる。この様の中で本当に健全な良い子供が育つのだろうか？

又、この十年間に高校も大学も進学率が伸び、高等教育の機会が拡大されるのは喜ばしい事に違いないが、果して、こうした教育期間の長期化が子供の肉体的な成長

に、どう云う影響を与えているのであろうか。

戦前の日本社会では、殆んどの子供が小学校を卒業する十二歳(あるいは高等小学校は十四歳)で実社会に出て、実社会の中で青年期を送り働きながら大人に成った。所が今は違う。殆んどの子供たちが学校の中だけで青年期を経過する。青年期を過す社会的環境が違ってくれば、その成長の仕方・大人に成り方も又違ってくるのは理の当然であろう。学校と云う社会は、それがどんなに上手く組織されていても、所詮、「つくられた社会」に過ぎない。その中からどんな青年が育つのか問題である。

中学でも高校でも、最近では大学でさえも、「人間形成の教育」が叫ばれている。所が、果して学校と云う「つくられた社会」の中だけで、青年期の人間形成が可能かどうかは疑問だと言えよう。

まず第一に、人間形成の教育はいったい何をやれば良いのか。その具体的教育内容や方法が必ずしもはっきりしない。国立教育研究所が全国の高等校長から、「人間形成に関して、何を重視するか」と云う意見を求めた事が有るが、それを見ても、「個性を豊かにする」、「自主性を育てる」、「社会性を豊かにする」などの、抽象的な言葉が多く、しかもそれを「どうやって育てるのか」と云う具体的方法は曖昧である。

しかし、それよりも重視すべき事は、子供たちが学校と云うつくられた社会の中だけで育つ事の意味である。以前の社会では、前にも述べた様に殆んどの子供が現実

社会の仕事や対人関係を通じて、人間を形成した。

就職すると云う事は、それがオフィスでも、工場でも、商店でも一日仕事を与えられて、それを責任を持ってこなす事を意味している。それでないと賃金がもらえない。そして現実の仕事はこなすには、努力や苦勞が必要である。そう云う日々責任ある課題を処理する事を通じて、以前の青年たちは大人に成っていった。この「日々」と云う要素が取り分け大事ではないかと思われる。

所が、「つくられた社会」の中ではどうであろうか。高校生や大学生を飼っていると、日々責任ある課題をこなしているとは言えない。宿題もないし、余程の事がなければ落第もしない、そう云う生活の中でどう云う人間が形成出来るのか。

高等教育が大衆化した米国でも同じ様な事が問題に成り、「実社会から遊離した学校で、先生と云うこれ又実社会を最も良く知らない大人だけに接触しながら、大部分の子供が青年期を過す仕には問題が有る」と、ある大学改革のレポートは指摘している。

教育期間の長期化に伴う第二の問題は、その長い期間子供たちが親の保護下に置かれていた事にある。言い換えれば、高校を卒業する十八歳迄、あるいは二十歳を過ぎては殆んど青年たちは、家族や地域社会に対する責任が免除されている。それに比べて、これ迄の青年たちの多くは十五歳を過ぎる頃から、家族や地域社会に対する何がしかの責任を持ち、それを果たす事の中で一人

前になった。時代が違うのだからと言えばそれまでだが、この様に大部分の青年が家族や地域社会に対する責任が免除されたまま成長する様に成った。

第三には、学校と云う「つくられた社会」の中だけで、しかも責任を免除されたままで育つと人間形成が難しく成るばかりでなく、学習意欲までが低下して行く。

仮に、病院のアルバイトをしたとしよう。そこで医者の仕事を観たり、患者と話しをしたりするうちに、自分も将来医療関係で働いてみたいと、思う様になるかもしれない。現実社会の対人関係に触れば、法律に対する関心が生まれるかもしれない。つまり、現実社会と接触すればその中から学習動機が生まれて来る。

同様に家族や地域社会に対する責任を果たそうとすれば、自から学習の必要を痛感する事にも成ろう。所が、学校と云うつくられた社会の中だけで成長するとそうはいかない。こう云う勉強がしたいと云う積極的な意欲がなかなか生まれてこない。つくられた社会の中では、学習動機がつかみにくいからだ。

それに加えて、現在の様な変化の急激な時代の青年たちは、十年後、二十年後の自分の生活を想像出来ない。どこで、どんな仕事に付き、どんな生活をしているのか考え様としても、想像の糸が途中で切れてしまう。自分の将来イメージが持てればまだそれに向って努力したり忍耐したりする事が可能である。所が、それが出来なくなつた事は、青年たちがそれだけ努力や忍耐の目標をつ

翔べおのれの中の鳥

畜産二年 栗原政宏

「男は、しゃべると虚しゅうなります」

といった。健サンの言葉が壊れかかった脳細胞に120%も泌み込んでしまつて、人間ちゅうのは、やっぱしおのれを抱きしめて歩いて行く以外に道はないのかいなあと、45度にうつ向くおのれの心に、ドンキホーテの憧れを求め得なかつた悲しみと喜びが、あふればかりの涙となつてこみ上げてくるんだ。

ハイライトの煙にむせ、とぎれとぎれのヤクザ映画を250ミリリットルの感覚でとらえ、存在は本質に先行する、そんな言葉をハリスのガムと一緒に毎分125回で噛みながらスクリーンに、10の激しさを持って問いかけてみる。幸福は個人的であるが不幸は、しばしば社会的であるのはなぜか。

自由になつたあとと自由や幸福になつたあとと幸福はどうなるのか。

健サンのテレビドラマ「あにき」は、6チャンネルだが、おのれの人生のチャンネルは、どこなんだ。

25才の10月は、ユラリユラリとゆれて生きようと沈黙している。人生なんぞ煙草のけむりに乗せて、とばしてしまえばいい。もともと人生に重さなどないのだから

かみかく成っている事を意味する。将来の為に今何をしたら良いのか、多くの青年たちがわからなくなっている。学校と云うつくられた社会の中だけに居る為に、学習の動機がつかみにくくなり、また変化の急激な時代の中で、学習の目的や意味がわかりにくくなっているのが、今の青年たちである。良く高校生の「三無主義」が問題になるが、彼等が置かれたこうした社会的環境を考えれば、むしろ当然かもしれない。

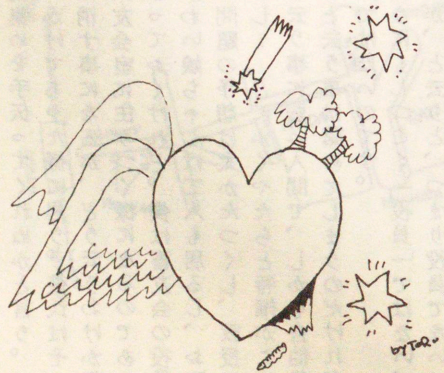
もっと別の見方をすれば、高学歴化が進行している事は、肉体的・知的にはすでに一人前だが、ただ経済的には独立出来ない学生と云う不安定層が、社会の中に増大している事を意味すると言えらるであろう。

彼等は知的であるだけに不満に敏感である。そして、家族や社会に対する責任を持たないから多分に無責任だ。さらに、自分の将来が想像出来ないから、速くに目標を置いて、目の前の欲望を我慢すると云う禁欲的生活態度に欠けている。そう云う不安定層の増大は一体何を意味するのか。

こうした高等教育の機会均等の拡大によって、日本の社会の将来にどの様なインパクトを与えつつあるのかと云う事を、もっと考えてみる必要があるのではないだろうか。

らかと斜にかまえてもミジメ鳥の声を5回も聞けば、理性と感性の間に新宿の街がにじんできたりするのだから始末におえないし、おのれの涙2500で割る焼酎をあおれば時速180キロメートルで頭の中をとびまわるのは、おのれの生きざま死にさみであり、又しても健サンに憧れたりするんだけれど、130キログラムのボクサーパンチでおのれをぶち破る健サンのエネルギーをあればあれよと、ただながめるだけでついでゆけそうになく、強いと言ふ事は理論だが戦かうと言ふ事は思想なんだと魂の思想化こそ急げと思ふのだ。1000

キロメートルも離れてしまつたおのれの人生の時を手元にたくり寄せるには想像力を媒介とするしかなく、95センチにも満たないおのれの貧困なイメージから生み落とされる鳥は翼を持つているのだ



るうか 翔べおのれの中の鳥 マッハ5で翔び、時を乗り越えろ 死んだ鳥は翼を持ったままだ 死んだ鳥ほど悲しい表情をしたものはない 翔べおのれの中の鳥よ

畜友会に想う

畜産二年 高 下 徹

後期テストなどそっちのけで、今、来年計画している「八ミリ映画」の撮映計画書と北海道旅行の計画書を作っていた所だ。

昔から乙女チックに夢みる方であったから？ こうした計画は何時間たとうがあきない。そのかわりコリ過ぎて今まで幾つも計画だおれの物がある。アフリカ無銭旅行だとか、空中三十秒停止飛行——等々。

ところで「畜友会に想う」等と云う原稿を頼まれて早一ヶ月がたとうとしているが、今まで何も書かなかったのは、生理の渡辺先生や農場の鈴木先生のお尻をたたく事に喜びを感じていたに他ならない（これは原稿催足の事です）。こんな事で、はたして「ふじみの十七号」は出来あがるのだろうか。

僕が畜友会なるものに首を突込み始めたのは、昨年度の「ふじみの十六号」からである。

でも僕は想う、彼みたいな、おおよそ、ソフトボール大会や収穫祭なんかの、お祭り騒ぎとは縁遠い人に、一番「かい一諸に騒いでみないか」と言いたいんだ。

畜友会室に入入りする様になって初めて、つまり学生生活を十何年間やっていて初めて、僕は、先輩後輩の厳しさ、そしてすばらしさみたいなものを感じている。

一つの物を（仕事）造ろうとする時の人の和はすばらしい。共通の想いで何かを造ろうとする時、人は前の日より大きくなる。何かとても大きな壁にぶつかった時、僕等は、悩み、苦しみ、そして想う。それらがたとへほんの瞬時であってもその想いはいつまでもその人の心に残っていて、いつかまた大きく育っていく日を待ちかまえている。

そんな事を繰り返していく内に、知らず知らず、僕等は成長していくのだろう。そして僕はこうも思う。

僕は今、二年生であるわけだけれど、三年四年になつた時に、後輩に対し、人の和のすばらしさをおしえられる様な人間に、彼等が壁にぶつかった時に適切なアドバイスを送れる様な先輩になりたいものだ、それは、僕が他ならぬ、畜友会の先輩達にしてもらったのと同じ事ではあるのだけれど。

さらに、こう思う。この様な継がりが、たぶん伝統と云うものなんだろう。より良い伝統が、我が畜産学科に残され、受け継がれていく事を願い、またそれは畜友会

秋元良平と云う悪い奴が、僕の所へ夜電話して来て「ふじみの」の原稿集めを手伝ってくれぬかと言う。それがそもそのきっかけてあった様に思う。彼氏はそのうち露のごとく姿を消す事になるが、どう云うわけか僕が、ダニのごとく茶友会室に住みつ়く様になるのである。ここで少しことわっておくけれど。僕は畜友会の役員ではない。そりゃかわい娘ちゃんは二人も居るし、お酒はただだし、試験の問題の予想は大かたつくし、教授に接近するにも便利だし？ とにかくやたらと特権がころがって僕がそう云う事に弱い人間で、しかも自他伴に「役員らしい顔」と云う事は認めてしまおうのだけれども。僕は絶対に役員ではないのです。

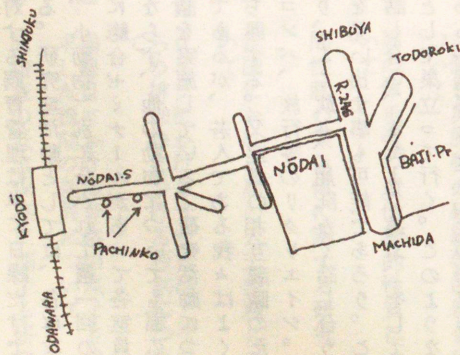
僕が何故由にこんなにもしつこく「役員」ではない、と云う事を強調するか、と云うと、つまり役員でない一般学生も気楽に畜友会の行事や、雑他もろもろの仕事に参加して、役員達に協力しようよ、と云う事を言いたかったのに他ならないわけである。

日頃畜友会の存在すら知らない人が実際幾人かいて、例のバッチイ小屋を指して「ここでみんな何してるんだい？」と僕に聴いた友達が実は居たんだ。何と云うか、僕とは、あきらかに違う世界に住んでるんだよね彼は。

僕は野次馬が大好きで、あっちこっちに首突込んで、生傷をついたり、単位を落としたりの口であるけれど、その友達に、わき目をせず、ひたすら、「しっかり歩いて」の口なんだろう。

役員の人達ばかりでなく、僕の様な一般学生の、一人一人の想いをも、後輩の代へ伝わって行くものだと感じているわけがあります。

もうすぐ僕の友人である役員達の、任期が終わろうとしている。この一年、野次馬にしか過ぎない僕に、色々な事をおしえてくれた、畜友会の人達に対し、お礼を申し上げるしだいです。「どうもありがとうございました」と。



研究室だより

昭和五十二年
畜産学
論題学
目科

家畜繁殖学研究室

当家畜繁殖学研究室は主任教授に一戸教授を、それに石島助教、門司助手の三先生方の御指導のもと、大学院生を含め七十名に近い室員が在籍している。家畜繁殖学の主たる目的は、育種学的に作出される優良家畜、つまりは社会的に要求される家畜において如何にすればその繁殖率が向上するかを学理、並びに応用面から追求する学問である。従って当研究室における研究内容も各動物ごとに多種多様に亘っており、室員はそれぞれ個々の役割分担のもとに動物に愛情をそそぎつつ、日夜真理の追究を行なっている。

現在、当研究室で飼育されている動物は、家禽として白色レグホーン種などの実用鶏、並びにほぼ天然記念物をもうらした日本鶏及びうずら、実験用大中国家畜としては繁殖、並びに間性豚、さらにマウス、ラット、兎などの多数の実験用小動物である。これらの動物の管理のために、朝八時三十分より当研究室の一日の活動が始まる。又週一回を原則として、全員で行なう作業日がある。我々はこれら実験用動物の身を捧げての協力が得られ

て、はじめて実験研究を行なっているわけであるから、これらの動物に対する飼育管理は単に日課だけでなく、大切な仕事である。研究室活動としては、各専攻動物（牛、豚、家禽、小動物）別に分かれて週一回のゼミナールがあり、他に総合ゼミナールがあつて各室員は自分の専攻動物のみならず、他の動物についても幅広い知識取得、並びに討議を実施している。研究活動については先に述べた通りであるが、若人である我々はよくボールをとり野球にうち興ずる。又室員の相互親睦のためのボーリング大会、コンバ、旅行等のリクリエーション活動も行なわれており、よく飲み、屈託なく話し合ううちに学生生活の意義を見出す事も可能であろう。この様によく学び、よく話し合い、またよく遊ぶ、そしてその後一人前の社会人として巣立って行く。このような大学生活の流れの中にある一過程として、その研究的な立場に基礎を置き、そこに集う我々の舞台が家畜繁殖学研究室であると理解していただきたい。

氏名	論文題目	指導員
4 赤堀 和彦	ムクドリ繁殖生態に関する研究	石島
24 井野真己子	ゴールデンハムスターの反復過排卵誘起に関する研究	萩原

40 大橋 徹	豪雪地域における酪農の現状とその発展性について	石島
41 大庭有美子	Gonadotropin によるモルモットの誘起排卵	石島
43 岡村隆太郎	戦前戦後における日本農業問題の比較検討	西脇
44 岡本 晃一	ホロホロチヨウにおける人工授精の応用に関する研究	西脇
49 折田 浩司	明暗リズムが産卵におよぼす影響特に十四時間照明十時間暗黒下における産卵状況について	西脇
53 川副 康一	馬の四肢傷害の治療に対する装蹄の意義について	渡辺
57 楠見 隆功	明暗リズムが産卵におよぼす影響特に二四時間連続照明下における産卵状況について	渡辺
63 黒田 力	ラットにおける受精卵の非外科的移植	渡辺
65 古口 博章	粉乳利用による豚精液の保存について	渡辺
74 笹沢 達雄	乳牛における正常卵巣と異常卵巣（卵胞の腫）との組織学的並びに生物学的比較	渡辺
83 志賀 敏彦		渡辺

94 杉山 康雄	牛精子の代謝に及ぼす子宮頸管粘液（腔粘液）に含まれるアミノ酸の影響	萩原
97 曾 徳昌	牛の子宮分泌液の糖の消長、及び子宮の組織学的考察	萩原
99 高梨 健治	解剖学的にみた野鶏と家鶏との比較、特にその骨格の点より追求した差異について	萩原
100 高野 博子	牛の腔粘液における糖の消長	萩原
103 竹内 敏夫	乳牛の卵胞の腫に関する研究特に卵液中のエストロロゲン値と卵胞壁の組織学的関係について	萩原
107 田沼 則男	馬の体毛色の遺伝学的性質について	渡辺
119 中村 英明	間性豚の染色体に関する研究	渡辺
128 林 隆彦	我が国における馬の人工授精について	渡辺
138 古市 和光	ウズラにおける光受容器とそれらの排卵時における役割について	渡辺
146 松井 清隆	鶏鶏目における骨格の点より追求した種間の差異について	渡辺
157 宮尾 俊晴	豚精液の低温保存に関する研究	渡辺

159	村山 優子	未成熟マウスの過排卵におよぼす estradiol の影響	石島
162	森 哲	日本における肉牛の将来性について	一戸
163	森 千佐子	スナネズミの過排卵誘起、特に PMS と HCG の有効投与量および投与間隔の検討	石島
166	山内 茂	未成熟家兔卵子の体外受精に関する研究	石島
168	山下 利三	雄日本ウズラにおける泡沫様物質の受精におよぼす影響	一戸
170	山田 弘文	豚の分娩に関する誘起分娩について PFG 2a による誘起分娩について	鈴木(伊)一戸
172	山本 実義	産卵鶏に対する甲状腺ホルモンの投与が、その孵化難に及ぼす影響	一戸
177	吉田 博幸	鶏に於ける下垂体前葉の投与が排卵及び放卵に及ぼす影響について	一戸
183	増田 健司	家兔卵子のマイナス七九C凍結保存に関する研究 特に凍結に有効な卵子の細胞期の検討	石島
185	上田 勇三	黒毛和種の分娩に関する研究	萩原一戸
191	杉山 修	飛騨地方における酪農の現状と将来	一戸

家畜育種学研究室

193	右川伝一郎	東南アジアの畜産の推移と発展に関する研究	一戸
197	吉岐 一仁	休学	
200	尾形 嘉博	ブライラの生産と流通について、特に福岡地区を中心として	一戸吉村
209	武田 博之	家畜における早期妊娠診断の文献的考察	石島

家畜育種研究室は、鈴木正三教授を室長に田中一栄助教授、天野卓講師の諸先生と研究室卒業生による特別室員、大学院生(八名)及び四年生(一四名)、三年生(九名)、二年生(一二名)、一年生(一名)、進三十六名から構成されている。研究室活動は、家畜育種の基礎的応用学的学問の追求を広範囲にわたりそして特に本研究室の特色としては血清学をその方法論として採用している。われわれの毎週の活動として、学生の自主的を考へにより出されたテーマについてのゼミナールそして談話会で活発な意見がなされている。ほかの研究室活動をあげて見ると当番があります。当番は、血清研(兎)、うさぎ小屋(兎モルモット)、ヤギ舎(羊、山羊)などの家畜に餌をあたえます。当番の割合は、一週間で三人づつになっています。やがてその各小屋及びやぎ舎の各家畜は、われわれ

の家小屋の動物はほかの研究室と比べて見ると同じぐらいの家畜が飼育されていると思います。ほかの研究室の活動をあげて見ると年一回ある研修旅行が待っています。研修旅行は、「友好」を目的とするためであるのですがやはり研究室員が一丸となりをえることを目的とするためにもあると思います。また年一回の「室報」の発行は特別室員との交流において重要な活動の一つでもあります。われわれの研究室のある場所は畜産本部近くにあるのが第一実験で畜友会のそばにあるのが第二実験室です。われわれの研究室にぜひ一度、勉強しに来て下さい。研究室員一同待っています。

14	井川 登	ウサギの染色体に関する研究	田中
23	稲葉 寿利	日本産イノシシの形態学的研究	田中
32	海井 秀之	牛亜科(Bovinae)の細胞遺伝学的研究	田中
46	奥田しとみ	犬の血清蛋白多型に関する研究	田中
69	小林 真美	馬の血球抗原に対する酵素処理の影響	鈴木
85	清水 一朗	水牛血液蛋白質の多型に関する研究	天野
98	大欣 靖子	ウサギの血液蛋白及び酵素の多型に関する研究	鈴木田中

109	玉置 勲	豚の白血球型に関する研究、リンパ球混合培養法(MLCC)による分類	田中
114	友田 孝子	牛血液蛋白質の電気泳動的変異	天野
132	福嶋 則男	牛血清酵素の多型に関する研究	天野
139	古川信一郎	水牛の血液型に関する研究。異種免疫抗体の作製	天野
147	松井 哲仁	水牛の血液型に関する研究。同種免疫抗体の作製	天野
158	宮窪 英治	分染法による豚と野猪の染色体分析	田中
195	宮本 成人	オーストラリアにおける肉牛について	鈴木田中
199	梅田 敏彦	水牛の形態学的、遺伝学的研究	鈴木天野
201	新部 昭夫	ホルスタイン種牛の体格に対する種雄牛、年令および地域の影響に関する研究	鈴木
207	佐藤 勇一	岩手県における和牛の飼養品種による改良目標の検討	鈴木
208	沢部 誠	馬の新生児黄疸症に関する調査	鈴木

家畜飼養学研究室

今日我国の畜産界は、世界的な穀物需給不安定による飼料価格の値上りの懸念、食品安定上の要請からの配合飼料添加物の規制強化など依然として厳しい環境にある。そのような中で飼養学及び飼養研の占める位置は、ますます重要になりつつある。

飼養学は、学問的分野としても広い範囲にわたっている。すなわち家畜飼養、管理、飼育という三本柱のもとに杉村敬一郎教授、伊藤澄磨助教授、栗原良雄講師、森田茂副手を中心とした指導のもとに種々の研究活動を行なっている。主な研究テーマとしては、アミノ酸、脂肪酸、エネルギー代謝、一般飼料、飼育管理、牧草・飼料作物関係等がある。

研究室行事としては、富士農場に於ける畜産実習、群馬県畜産試験場に於ける家畜管理実習並びに、一般飼料成分々析演習等を行なっている。また室員相互の親睦を計るため、野球大会、研修旅行、餅つき大会等を行なっている。

現在の室員数は、杉村先生、伊藤先生、栗原先生、森田先生、大学院五名、四年生三五名、三年生三二名、特別室員二名である。

60	条 雅明	若令種雄豚に脂溶性ビタミン剤を投与した場合の精液性状の変化に関する研究	伊藤 鈴木
61	栗原 知之	主 題 糸桑サイレージの飼料化 副 題 飼料に関する研究	伊藤 栗原
78	里見 研二	主 題 サイレージ調製時の踏圧度合が組成に及ぼす影響	伊藤 大谷
79	去川 光弘	主 題 サイレージの二次発酵に 副 題 踏圧度合が取り出し後の経時的成分変化に及ぼす影響	伊藤 大谷
81	椎名 好一	主 題 食餌中グルタミン酸の急性欠除の器官中遊離アミノ酸への影響	伊藤 杉村
86	清水 千晴	主 題 Influence of dietary 副 題 serine deprivation to rat tissues.	伊藤 杉村
88	下平 清孝	主 題 Influence of dietary 副 題 serine deprivation to rat tissues.	伊藤 杉村
90	菅原 道博	主 題 ニワトリ精液の性状に関する研究	伊藤 伊藤
92	杉本 昭	主 題 産卵鶏用市販配合飼料の比較試験並びに卵質の比較	伊藤 栗原

12	飯沼 博康	主 題 オートチャードグラスの刈取時分 副 題 及ぼす影響	伊藤 大谷
28	岩間 由彦	主 題 給与飼料による豚糞排泄量並び 副 題 糞形態の変化に関する研究	伊藤 鈴木
29	宇佐美伸一	主 題 鶏のエネルギー代謝に関 副 題 する飼料中の粗繊維量が消化 率におよぼす影響	伊藤 栗原
36	江原 慎二	主 題 幼すうにおける必須脂肪 副 題 酸に関する研究	伊藤 栗原
39	大野 靖	主 題 飼料中の炭素・窒素バランスに 副 題 関する研究	伊藤 栗原
47	荻田 重男	主 題 幼すうにおける必須脂肪 副 題 酸に関する研究	伊藤 栗原
50	笠井 彌	主 題 産卵鶏用市販配合飼料の 副 題 比較試験並びに消化率の	伊藤 栗原
58	久保園洋市	主 題 青刈トウモロコシの多期 副 題 作栽に關する研究	伊藤 大谷
59	久保田 寿	主 題 放牧草地に関する研究 副 題 草生が乳牛の採食量に及 ぼす影響	伊藤 大谷

110	丹上 啓	主 題 反すう胃内容物の飼料化 副 題 容乳給与の効果について	伊藤 栗原
116	内藤 幸博	主 題 成長時における家兎の蛋白質要 副 題 求量に関する研究	伊藤 栗原
125	野中 秀敏	主 題 非必須アミノ酸の急性欠除に伴 副 題 う器官中遊離アミノ酸の	伊藤 杉村
136	藤川 昌昭	主 題 幼すうにおける必須脂肪 副 題 酸に関する研究	伊藤 栗原
143	前畑 嘉里	主 題 豚の肥育に関する研究 副 題 及ぼす影響	伊藤 鈴木
148	松井 元雄	主 題 給水量が産卵鶏に及ぼす 副 題 影響	伊藤 栗原
149	松村 明彦	主 題 給水量が産卵鶏に及ぼす 副 題 影響	伊藤 栗原
153	三浦 透	主 題 バナナの飼料価値に關す 副 題 に関する研究	伊藤 栗原

154 水口 良水 カウンセリングに於ける体験的
 180 渡辺 祐次 応答に関する一考察
 主 題 バナナの飼料価値に關する
 副 題 鶏の研究におけるバナナの消化
 率測定
 栗伊藤 原藤

187 和田 保男 牡令種雄豚に脂溶性ビタミン剤
 を投与した場合の精液性状の変
 化に關する研究
 栗伊藤 原藤

188 上村 秀之 反すう胃内容物の飼料化
 副 題 屠畜反すう胃内容物の飼
 料成分組成
 栗伊藤 原藤

189 奥沢 利男 肥育豚における市販配合飼料の
 比較試験
 栗伊藤 原藤

190 北瓜 哲夫 子豚の育成に關する研究
 副 題 飼料中の蛋白質含有量が
 發育・生産に及ぼす影響
 栗伊藤 原藤

194 森田 常重 鶏のエネルギー代謝に關
 する研究
 副 題 飼料中の粗繊維量が熱量
 増加におよぼす影響
 栗伊藤 原藤

202 吉川 勲 阿蘇地域における複合畜産の經
 営分析
 吉藤 伊藤

203 内田 昌宏 都市近郊酪農の現状と将来性
 伊藤 藤野 祐彰
 212 家畜衛生学研究室
 本研究室は、近江弘明助教授、渡辺忠男助手、山本晃
 裕副手各先生の御指導のもとに、四年生三〇名、三年生
 一八名、二年生三名、室員一同が一体となって活発なる
 研究活動を行っている。
 研究活動としては、一昨年から各々希望する家畜禽別
 に分け、牛班、豚班、鶏班、犬班、小動物班の五班で実
 際問題になつてゐる各種疾病に対する予防法及び糞尿処
 理など家畜衛生(家畜家禽の生命を脅かす種々の健康阻
 害因子を除去し、家畜家禽の生命の延長をはかり、かつ
 生産を向上せしめることが主な目的である。)の立場か
 ら独自に追求している。
 また、両先生が兼務しておられる本学家畜診療所にお
 いても、一般外来動物の診療を中心とした各種の研究活
 動が行なわれている。
 その他研究室の活動内容は、年間行事として新入室員
 歓迎会、野球大会、収穫祭参加(文化展、模擬店)、新
 陸旅行、送別会、定例会、セミナーなどがある。
 毎日の仕事としては、当番制になつてゐる実験動物の
 飼育管理、卒業論文の手伝い(三年生以下)、診療所の

手伝い(希望者)を行なつてゐる。

本研究室の大きな特色として、その研究内容は言ひま
 でもなく、室員各自が室員としての自覚と責任を持ち、
 一人一人がその運営に大きく貢献していること、また、
 本学厚木農場との行き来が他にも増して活発であること
 である。

このような多面活動において学生生活の充実を計り、
 室員各自の個性を引き出し、その個性を持ちより、研究
 室独自の個性を創造するという事に我々は目標を置いて
 いる。
 十一月には新役員も発足し室員はますますはりきつて
 いる。

5 浅井 友也 ヘアシャンプーが犬の被毛に
 及ぼす影響
 近江

6 浅賀 烈 東京山椒魚の生態に關する研究
 15 池谷 裕統 子豚の下痢の予防に關する研究
 | グロブリン製剤の応用 |
 近江

17 石川 裕理 放牧飼育におけるPSB豚の発
 生状況とその要因について
 近江

19 石田 智三 野鶏における脳下垂体前葉ホル
 | モンに關する研究 |
 | 一特にプロラクチンに |
 近江

22 伊東 祐一 実験動物における麻酔法の検討
 近江

25 今井 智 豚ジラミの駆除に關する研究
 | 殺卵剤について |
 近江

27 岩淵美津枝 乗馬における運動中の心拍数の
 反応
 | 運動強度と心拍数 |
 近江

34 浦山 英子 犬フイラリア抗虫剤応用に
 するマイクロフイラリアの血中誘出
 法について
 近江

38 大高 広昭 発癌剤M.N.N.G投与家兎の血液
 性状について
 近江

45 奥田晃一郎 公園内排泄犬糞の内部寄生虫に
 ついて
 近江

48 小野内 衛 発癌剤M.N.N.G投与家兎の臨床
 所見並びに病理学的所見につ
 いて
 近江

51 加藤 是宏 犬フイラリアに対する砒素剤ア
 ルセナミドの駆除効果
 近江

54 河野 惠輔 野外における鶏マイコプラズマ
 の抗体調査
 近江

64 黒柳 和幸 耳疹癬人工感染家兎の血液性状
 について
 近江

70 後藤 孝治 畜舎内飛来衛生害虫に対する忌
 避・駆除法の検討
 近江

75	指田 正雄	野外におけるNDワクチネーション・プログラムの検討	近江
76	佐藤 和夫	肉牛の分娩に伴う体温、脈拍数呼吸数について	近江
82	塩谷 博幸	各種細菌の保存に関する研究	近江
84	柴 富士雄	犬の腸管内寄生虫の駆除に関する研究——注腸法について——	近江
87	霜島 正人	豚舎内の細菌相に関する研究	近江
101	高橋 博幸	家兎における大腸の組織学的構造について	近江
111	千葉 正幸	自然環境下放置牛糞の細菌の推移について	近江
117	中田豊四郎	各種培地における細菌間の薬剤耐性の伝達について	近江
126	長谷川 元	鳩の外部寄生虫に対する駆除法の検討	近江
129	林 俊明	觀賞魚の外部寄生虫に対する駆除法の検討	近江
131	日下 一幸	鶏の生長に伴う血液性状について	近江
137	藤戸 博康	豚ジラミの駆除に関する研究——抗成虫剤について——	近江
151	三浦 一弘	家畜の糞尿処理に関する実態調査	近江
156	箕浦 克子	豚ジラミの産卵部位に関する研究——被毛の電子顕微鏡的観察——	近江
160	目良 健一	乳牛における肝蛭駆除後の臨床所見について	近江
164	矢口 克明	舎飼におけるPSB豚の発生状況とその要因について	近江
167	山下 輝彦	アルコールの長期経口投与が家兎の血液性状に及ぼす影響	近江
169	山崎 悦子	発癌剤3-1-D-A-B投与ラットのα1フェトプロテインの推移について	近江
179	六郎田健三	ミクロフィラリア陰性犬ぬおけに基礎素剤投与後の血液性状並びに臨床所見について	近江
181	和田 幸一	肝蛭寄生牛の血液成分並びに尿成分に関する研究——	近江
192	滝沢 伸	牛乳房炎の治療に伴う乳汁中の細菌の推移について	近江
196	森川 好彦	PSB豚の発生状況とその要因について——内部臓器・肉質との関係——	近江
214	座間 勝基	野外における豚トキソプラズマの抗体調査	近江

家畜生理学研究室

私達の研究室は、昭和五十二年度に、家畜育種学研究室より分離独立したばかりの、まだ新しい研究室です。構成室員は、渡辺誠喜教授を筆頭に、大学院生三名（博士前期課程一名・同後期課程二名）・学部学生は、四年次生十名・三年次生十名・二年次生五名の、計二十九名より成っています。

当研究室の研究テーマは、(一)家畜家禽の内分泌生理に関する研究。(二)家畜家禽の代謝に関する生理遺伝学的研究。(三)家畜家禽の体液に関する免疫血清学的研究、の三つに大別され、家畜家禽の内面、すなわち生理面から、蛋白質生産性の向上を計ることを目的としており、全室員がそれぞれ協力し合い、特に大学院生には学部学生が上級生には後輩が協力、応援し、各自の研究題目に向けて邁進しています。

当研究室の環境としては、実験・研究に関しては、それぞれ厳しく指導が徹底していますが、反面、自由な時間帯には、大学院生から学部二年次生まで、多少行き過ぎると思われる程の無礼講の会話が交され、そういう環境の中から、学問的のみならず、人生問題についても、疑問が生じた場合は、先生を始め大学院生及び諸先輩の方々が、心良く、明確に指導をしてくれるという、非常に居心地の良い室で、室員一同愉快地生活をしています。

9	阿部 圭作	ニホンウズラの標識遺伝子の固定に関する研究	渡辺
13	池田 司史	山羊の脳下垂体ホルモンに関するホルモンの研究、特に性腺刺激ホルモンに関する研究、特に交換	渡辺
66	小林 和彦	飼育下におけるペンギン類の行動・繁殖・育雛について	渡辺
68	小林 誠	ハタネズミの実験動物化に関する研究、特に血液生理学的研究	渡辺
72	三枝 弘育	綿羊のR-O-Systemに関する研究、特にO1物質と血清アルカリホスファターゼの活性について	渡辺
106	田中 啓二	鳩の属間雑種に関する研究、特に腺の免疫学的関係について	渡辺
120	中村 守	日本鵜の標識遺伝子に関する研究、素について	渡辺
130	原田 隆男	ホロホロ鳥とニワトリ並びにニホンウズラの属間雑種に関する研究	渡辺
198	井田 宏之 伊藤 晶啓	我国における山羊産業の現状と将来性に対する一考察 (提出済)	渡辺

畜産経営学研究室

当研究室は吉村教授をはじめ、桜井講師・石岡助手らの各先生と学生室員四年生二二名、三年生二〇名が一体となり活動しております。

経営研究は主に、「経営経済学」であり、それとは別に、経営の社会学的研究が「経営社会」、その技術的過程によるところの研究が「経営科学」、さらに諸々の一連の経営に関する研究がそれぞれ独立して展開されているのである。「経営学」などという経営自体を総合してうけとる研究は、すくなくとも学界には存在しない、この分野でいえることは、より実在に即して研究が進められていくことが指摘できよう。そこで私達の研究のテーマというものを、日本の現状に即した方向から畜産経営の経済性というものを追求しようとするものであり、この現代のめまぐるしい社会の中にあつて絶えずゆれ動く農業というものに真正面から対応できる、そう言った使命感を持った連中の集まりなのです。

現在、研究効率を高めるために、養豚・養鶏・酪農・肉牛の四班に分かれ、それぞれが希望するところに自由に、諸研究・セミ等が行なわれています。またその他に年夏休み中の研究活動として、各地方に出張し、農村地帯の実製調査を行なつて、その地域に於ける諸問題の追求・改善点を畜産経営の立場より解明して研究の基礎を養うわけであります。

以上、こぬような研究活動はもちろんのこと、年間行事としては、新入室員歓迎会・収穫祭・親睦旅行・畜友会ソフトボール大会参加とその他諸々のコンパ等、実に魅力にあふれるアットホーム的なところですよ。このような多面的な活動を通じて学生生活の充実を計り、今後もお飛躍をめざす、そんな処なのです。

どうぞ一・二年生の後輩諸々も一度、是非我が心の「畜産経営学研究室」に御訪問あれ。

- 1 青木 厚子 農村婦人の農外労働に関する研究 吉村
- 3 赤井 等 近畿地域における養豚の動向と展開
—特に大阪地区について— 吉村
- 8 阿達 正喜 東南アジアにおける水牛飼養に関する一考察 伊藤 吉村
- 33 浦谷 康彦 酪農経営の規模別収益性について 吉村
- 35 榎本 光子 農村青年の社会教育に関する研究 吉村
- 55 蒲生 恵 福岡県におけるブローラー経営の展開 吉村
- 67 小林 健治 專業経営と複合経営の比較経済性に関する研究 桜井
- 77 佐藤 尚之 企業養豚における生産経済に関する研究 吉村

- 80 椎名 克文 豚肉の流通機構について 吉村
- 89 庄司 勉 山口県本郷地区における草地造成の設計について 吉村
- 91 杉橋 宏和 下総地区における畜産農家と耕種農家の経営的相互補完関係について 桜井
- 95 鈴木 正 残飯養豚の比較有利性について 吉村
- 102 高松 利昌 牛肉の流通問題とその農政について 吉村
- 105 田中 和博 オーストラリアの牛肉生産と貿易について 吉村
- 112 土屋 孝志 静岡県田方郡南部地区における酪農の現状と展望 吉村
- 113 寺嶋 達彦 養鶏廃棄物の公害対策とその有効利用について 吉村
- 121 成田 精治 都市近郊酪農の収益性について 桜井
- 123 西出 艶司 松阪牛の発展過程と展望について 桜井
- 127 羽太 敏男 千葉県山武郡における水田酪農の経営的研究 吉村
- 133 福田 利明 栃木県酪農協同組合の経営分析 桜井
- 134 福原 誠 安房地区における酪農経営と展望 桜井

- 141 古沢 栄作 栃木県塩谷郡における肉牛の経営設計 桜井
- 142 坊木 人己 飼料作物栽培における施肥と収量および硝酸態窒素含有量との関係について 麻生 吉村
- 150 的射場 修 ホルスタインの若令肥育の生産費分析 桜井
- 175 吉田 和典 酪農経営の設備投資安全率と収益性に関する研究 桜井
- 178 吉村伊知郎 養鶏の集団管理と個体管理の比較経済性について 吉村
- 186 岩佐 泰伸 赤城南面地方における養鶏の動向と展望 吉村
- 211 福島 修一 開放鶏舎の要点と問題点について 吉村
- 20 石田 豊 養豚の一貫経営における生産費分析について 吉村

畜産物利用学（肉）研究室

我々が所属しているのは通称「肉研」正式名称は「畜産物利用学（肉）研究室」という。皆さんは収穫祭においてロースハム、ベーコン、スモークドチキン等を販売している当研究室を御存じの事と思ふ。

現在、当研究室は鬼原教授、松岡講師両先生のもとに三、四年生二四名の室員（全て男）が在室している。こぬ二四名という数字が示すとおり、少人数であるから、家族的な環境でのびのびと実験実習ができることが肉研の特徴である。研究室の主要研究テーマとしては「畜肉の肉質に関する研究」「肉及び肉製品の保存に関する研究」「肉・卵利用加工上の諸問題に関する研究」等がある。肉研は製造実習でハムヤソーセージばかりを作っているのではと考えられているかもしれない。確かに肉研では製造実習も行なうが、他にも肉・肉製品の成分（水分、脂肪、蛋白質、灰分）検定、肉色の測定、肉の結着性・保水性の測定、肉のアミノ酸の定性分析等々（これはほんの一部）の実験しているのである。我々にとってこの実験は肉に限らず広く一般食品にも応用できる有益なものとなっている。

肉研はこのように実験や製造実習があり徹夜もさほど珍しくない程忙しい。特に収穫祭前などはロースハム、ベーコン等の製造でもう猫の手も借りたいような忙しさである。しかし、これといった実験もできずにボーとして過ごすよりはずっと充実しておりやりがいのあるものである。女子室員募集!! ここまで書いてきた皆さんは肉研の所在地を御存じだろうか、実をいうところとして「研究室だより」を書いている私も入室するその日まで知らなかったのである。肉研は応援の向い側にある。学校の行き帰りに肉研の横を通っている人も多いである。

り。建物は古くみすぼらしいが本屋には教授室実験室、病科糧室、準備室があり、横の加工所には実習室、解体室、くん煙室等がある。研究に関する設備は万全である。ただ実験器具が不足がちなのは肉研だけではあるまい。肉研の年中行事は

- ・ 収穫祭の収益による秋の研修旅行
 - ・ 新歓コンパ・追い出しコンパ
 - ・ 収穫祭用の肉製品の製造
 - ・ 卒論発表会
 - ・ 週一回のためになるセミナー
- があり、他にコンパや写真会等もある。

肉研では、室員相互の親睦を深めつつ、一般社会に通用する人間形成をはかり、自らの知識を豊富にするよう、室長以下室員全員がたゆまぬ努力を重ねているのです。

- 2 青山 均 うずらおよびホロホロ鳥肉脂質の脂肪酸ならびにトリグリセリド組成について 鬼原
- 37 大石 佳明 ホロホロ鳥肉、肉漿蛋白質の貯蔵加工における性質の変化に関する研究 鬼原
- 71 後藤 豊 豚肉の再凍結に関する研究 松岡
- 115 友松 利彦 再凍結が骨付カット肉の肉質に及ぼす影響について 鬼原
- 155 友松 利彦 うずら卵黄蛋白質の乳化性に関する研究 鬼原

124 野口 淳 と殺前のストレスがブロイラーの凍結保存中の変化に及ぼす影響

140 古郡 彰雄 ホロホロ鳥肉の凍結保存中の変化に関する研究 鬼原

144 真茅 学 ホロホロ鳥肉、死後の変化に関する研究 鬼原

176 吉田 国夫 と殺前のストレスがホロホロ鳥肉死後の状態に及ぼす影響 鬼原

205 河合 昭一 酸度調線ソーセイジに関する研究 鬼原

210 田丸 治 豚肉の再凍結に関する研究 松岡

213 伊藤 博介 再凍結肉蛋白質の extractability 及び電気泳動図から見た変化について
卵白注入豚肉を原料としたローハムの品質に関する研究 鬼原

畜産物利用学（乳）研究室

当研究室は室長の山中良忠助教授、古川徳講師の両先生のもとに普通室員（四年生三名、三年生以下十四名）、準室員（二名）及び特別室員から構成されています。

本研究室の主な活動は乳・乳製品及び卵・卵製品に関する理化学的、細菌学的研究であり、無菌室、ドラクマ

1室、ガスクロマトグラフィ、分光光度計等の完備された器具設備の利用により、一層高度な研究を可能にしています。

又、特に卵の分野への研究が進められ、卵・卵製品の分析と乳・乳製品への利用等の研究も行なわれています。又、これらの研究を通じて室員相互の親睦を計り、人間形成を目的としていることも当研究室の特徴の一つであります。

本学卒業で乳業に従事している方々の親睦会である「楽乳会」の事務取り扱いに通しても先輩諸兄の御指導と御鞭撻をいただいております。

- ◎当研究室の主な行事
- ・ セミナール
- ・ 新入室員歓迎会
- ・ 夏期乳製品製造実習
- ・ 収穫祭への参加
- ・ 秋の親睦旅行
- ・ 卒業論文発表会
- ・ 卒業生送別会

- 31 内堀 尊之 Compound butterの製造法の検討 山中
- 174 湯浅 美紀 産卵鶏の環境騒音による放卵への影響 伊藤
- 104 田代 勝 可食性被膜剤の塗布が鶏卵の品質に及ぼす影響 山中
- 16 石井 正 粉乳貯蔵中における揮発性カルボニル化合物の変化について 古川

昭和52年度畜友会会計報告

収入の部

前年度繰越金	246,237
新入生(164×5,000)	1,020,000
編入生(7×1,500)	10,500
転科(1×2,250)	2,250
利息	6,930
その他	3,200
	<hr/>
	1,289,117

支出の部

	予 算	決 算
卒業生送別会	53,451	53,451
卒業生記念品	61,600	61,600
ふじみの16号	324,500	324,500
1年生オリエンテーション	25,000	37,800
新入生歓迎会	70,000	65,345
講演会	5,000	2,850
スポーツ大会	35,000	24,640
ハイキング	30,000	0
リスト	5,000	1,938
収穫祭説明会	18,000	18,200
収穫祭援助費	320,000	320,000
収穫祭赤字援助金		10,245
コンパ援助	40,000	20,400
事務費	60,000	56,335
予備費	201,376	
	<hr/>	
	1,248,927	997,304

(収入総額) 1,289,117 - (支出総額) 997,304 = 291,813

会計監査及び12月13日の畜友会総会に於いて承り承認されました。

畜友会・会計 大久保 日出世

昭和52年度畜友会行事報告

- 51年12月18日 昭和52年度畜友会活動開始
- 52年 2月7日 昭和51年度卒業生送別会(4号館共通実験室)
- 3月20日 卒業生記念品贈呈
- 4月11日 年間行事計画及び予算案作成
役員補充(羽田野)
- 4月14日 役員補充(中山)
- 4月18日 新入生オリエンテーションにおいて畜友会の説明
19日 (富士農場)
- 4月22日 クラス役員選出
会計監査委員選出
選挙管理委員選出
規約改正委員選出
- 4月27日 役員補充(斉藤, 村瀬)
- 5月2日 新入生歓迎会(4号館共通実験室)
- 5月4日 役員補充(伊藤)
- 5月9日 研究室役員選出
- 5月23日 講演会(講師 一戸健司教授)
「東南アジア帰国報告会」
- 5月29日 ソフトボール大会
- 6月13日 ふじみの編集委員会設立
- 6月 ~7月 夏季個人実習農場リスト作成及び紹介
- 8月4日 1年生厚木農場実習において
収穫祭の説明会
- 9月27日 収穫祭本部開き
(畜産学科第85回収穫祭実行委員会発足)
- 10月 収穫祭
~11月
- 12月13日 昭和52年度畜友会総会(4階講堂)
- 12月13日の畜友会総会に於いて承認されました。

第85回収穫祭畜産学科会計報告

収入の部	
畜友会よりの援助金	320,000
前夜祭本部よりの援助金	15,000
体育祭本部よりの援助金	35,000
特別企画本部よりの援助金	31,000
収穫祭本部より北門への援助金	120,000
	<hr/>
	521,000

支出の部			
	予算	援助金	決算
総務費	120,000		138,565
北門		120,000	120,885
前夜祭	10,000	15,000	15,960
体育祭	50,000	35,000	87,830
特別企画	40,000	31,000	74,270
宣伝ストーム	70,000		73,735
文化展	30,000		20,000
	<hr/>		
	320,000	201,000	531,245

(収入総額) 521,000 - (支出総額) 531,245 = -10,245 (赤字)

※赤字分は畜友会より補助されたい。

上記相違ない事を認めます。

4年	古市和光	2年	檜島真
3年	大野隆司	1年	吉田久満男

東京農業大学畜産学科

“畜友会”規定

第一章 総則

- 第一条 本会は東京農業大学畜友会と称す。
- 第二条 本会は東京農業大学在学学生、教職員、及び卒業生をもって、相互の親睦をはかり、本学の発展に寄与することを目的とする。
- 第三条 本会の事務所は、東京農業大学畜産学科本部におく。

第二章 会員

- 第四条 本会の会員は左記の三種をもって組織する。
 - 一、正会員
 - 二、特別会員
 - 三、名誉会員
- 第五条 正会員は東京農業大学畜産学科在学学生、特別会員は東京農業大学畜産学科卒業生、並びに教職員。名誉会員は役員委嘱により承認を得たもの。
- 第六條 会員が本会の業務執行妨害あるいは名誉を失せる行為をした時は総会の議決により除名する。

第三章 役員及び機関

- 第六條 本会は左記の役員をおく。
 - 一、委員長一名、副委員長二名、書記二名、会計一名、会計補佐一名、渉外二名、企画三名、庶務二名
 - 二、一年クラス委員四名、二年クラス委員四名、研究室委員八名
 - 三、監査員四名
- 第七條 本会は顧問をおき、畜産学科長ならびに畜産学科主事が此の任にあたる。
- 第八條 一、委員長、副委員長、書記、会計、渉外、企画、庶務は選挙によって、計十四名選出する。なお選挙規約は別に定める。
- 二、第六條第二項、第三項に定められた役員は一、二年二名、各研究室一名ずつ、監査委員は各学年一名ずつ選出する。
- 三、(なお、専攻生は、各研究室員の中に含まれる。)
- 第九條 欠員が生じた場合は、速やかに補充しなければならない。
- 第十條 役員の任期は原則として一年とする。
- 第十一條 総会は正会員より構成され、本会の最高決議機関とする。
- 第十二條 総会は正会員の三分の一以上より成立する。

- 二、委任状は署名捺印（拇印を含む）を必要とし、議長に一任する。
 - 三、委任状は総会に際し定足数に含まれる。但し、委任状は議長委任とし、正会員総数の四分の一までとする。
 - 四、委任状の検査は役員が行なり。
 - 五、本条文は昭和四十三年十二月十八日をもって追加し即日効力を発する。
- 第十二条 定期総会は年一回十一月に召集する。臨時総会は左記に該当した場合一ヶ月以内に召集しなければならない。
- 一、正会員の四分の一以上の同意を得て、開催目的及び召集理由を記載し委員長に提出あるとき。
 - 二、役員のおよそ三分の二以上が必要と認められたとき。
- 第十三条 総会の開催は五日前に公示しなければならない。
- 第十四条 総会における議長は、総会においてその都度互選する。必要に応じて議長は副議長を指名する。
- 第十五条 総会の議決は、出席者の過半数によって議決され、可否同数のときは、議長の決するところによる。
- 第十六条 総会の過半数により、役員の不信任を可決できる。

第六章 監査

- 第二十四条 本会の業務を円滑、正常化する為監査委員をおく。
- 第二十五条 監査委員は、前条の目的達成の為、年度末に会計監査を行なり。
- 第二十六条 監査は監査委員が必要と認めれば随時できる。監査委員は第六条第一項、第二項の役員に兼任は出来ない。
- 第二十七條 本規定解釈の疑義は、委員会において、最終的解釈する。
- 第二十八條 本規定の改正、及び追加は総会においておこなう。
- 第二十九條 本規定は昭和三十五年六月二十九日より施行する。



第四章 業務

- 第十七条 第六條第一項、第二項に定められた役員は本会の最高執行機関たる委員会を構成し、此の召集を委員長が行なり。
- 第十八條 本会の事業年度及び会計年度は十二月一日より翌年十一月末日までとする。
- 第十九條 本会は左記の業務を行なり。
- 一、会員親睦会
 - 二、講習会及び研究発表会
 - 三、見学調査
 - 四、機関紙の発行
 - 五、その他第二条に附帯する業務
- 第五章 會計
- 第二十條 会費は年間一二五〇円とする。その納入は四年分一括し、入学金と同時に大学会計窓口を通じて納入のこと。
- 第二十一條 本会の運営は会員の納入する会費で運営する。但し第十九條の業務執行にあたり臨時徴収する場合もある。寄附行為は認める。
- 第二十二條 納入金の払い戻しは行なわない。
- 第二十三條 但し入学取消しの場合はその限りではない。決算報告は十月末日までに作成し公示する。承認は定期総会において行なり。

畜友会選挙規定

第一章 総則

- 第一条 この規定は、畜友会役員の撰挙に関し、選挙が公明、且つ円滑に行なわれることを目的とする。
- 第二条 この規定は、畜友会規定第六條第一項に基づく役員選挙に適用される。
- 第二章 選挙管理委員会
- 第三条 第一条の目的を達するため、東京農業大学畜友会選挙管理委員会を設置する。（以下本会又は単に選挙管理委員会と呼ぶ。）
- 第四条 本会は、畜友会役員の選出に關して全ての権限を有する。
- 第五条 本会の委員は、各学年より一名ずつ選出し、委員長はその中より互撰する。ただし、これに畜友会役員、及び被選挙人は兼任できない。
- ただし、各学年の在籍数の過半数によって選挙は成立し、三分の二以上の挙手二名以上の場合は挙手をもって最高級を当選とする。
- 第六条 本会の委員の任期は原則として、畜友会の

第七條 事業年度に準ずるものとする。

第八條 本会は選挙が公明且つ適正に行なわれるように常にあらゆる機会を通じて、公示及び選挙期日、方法、その他必要と認める事項を畜友会会員に周知させなければならぬ。畜友会規定第十六条によって、畜友会役員の不信任を審査し、成立した場合には、本会は新たに役員を選挙を行なう。

第三章 選挙

第九條 選挙はクラス、研究室の移動投票により行なう。

第十條 一、投票期日並びその期間は事業年度終了日以前の日時を原則とし、選挙管理委員会がこれを定める。

二、畜友会役員の不信任が成立した場合には、二週間以内に選挙を行なう。

第十一條 選挙管理委員会は投票日の十日前に公示しなければならぬ。

第十二條 選挙人、及び被選挙人は、畜友会正会員とする。

第十三條 選挙は立候補制とし推薦者一名を必要とする。

第二十條 当選は有効投票数の上位の委員定数までの者とする。

第二十一條 立候補者が定数のときは信任投票を行ない有効投票数の過半数をもって当選とする。

第二十二條 選挙管理委員会は開票後二日以内に適当な方法をもって、当選者を公表しなければならぬ。

第二十三條 選挙管理委員会は選挙記録を作成し、一年以上保管する。

第二十四條 選挙管理委員会は畜友会会員に選挙記録の提示を求められた時には、いかなる事情があつてもこれに応じなければならぬ。

第四章 予算及び監査

第二十五條 畜友会は選挙管理委員会の必要とする経費を支出しなければならない。

第二十六條 選挙管理委員会は年度末に畜友会会計監査委員の監査をうける。

第五章 改正

第二十七條 本規定は畜友会総会において三分の二以上の賛成をもって成立する。

第二十八條 本規定に疑義が生じた時は、選挙管理委員会が最終的に解釈する。

第二十九條 本規定は昭和五十年四月一日より施行する。

第十四條 選挙管理委員会は立候補者に対して選挙宣傳の為、適切な援助を与えるものとする。

第十五條 投票に關しては左記の規定に基づいて行なう。

(イ) 投票は同一投票用紙において役員十四名については無記名で投票する。

(ロ) 投票は選挙管理委員会の定める用紙により行なう。

(ハ) 代理投票及び不在者投票は認めない。

(ニ) 投票箱は厳重に封鎖されたものを用い、投票終了後は封印され、開票時まで開くことはない。

(ホ) 投票場は選挙管理委員会が定める。

(ヘ) 開票は全投票終了後、ただちに行なう。

第十六條 開票は選挙管理委員会の定める場所において、立候補者またはその代理人の立合いのもとで行なう。

第十七條 左記の投票は無効とする。

(イ) 正規の投票用紙を用いていないもの。

(ロ) 立候補者以外の氏名を記入しているもの。

(ハ) 選挙管理委員会が不明と認められたもの。

(ニ) 畜友会正会員の二分の一をもって最低投票数とし、これに満たないとき、選挙は無効とする。

編集部では「ふじみの」第十八号の原稿を募集致しております。より一層充実したものとす為にも、名譽会員、特別会員、学生多数の御協力を願ひします。

記

募集期間 五十三年九月、十一月中旬
要項 ○論文、随筆、紀行文、主張
四〇〇字詰、十枚以内
○写真カット、は随意
○表紙図案、三色以内

宛名 東京都世田谷区桜丘一―一―一
東京農業大学畜産学科内 畜友会

発行日 昭和五十四年一月予定
ふじみの編集委員会行

応募原稿は一切お返し致しません

畜友会「ふじみの」

編集委員会
TEL (四二〇) 二二二一(呼)

編集後記

「ふじみの第17号」を発行するに当たり、諸先生方をはじめとし、各方面に原稿を募集いたしましたところ、数多くの原稿を頂くことが出来、ここに新しい「ふじみ」の足跡を残すことが出来ました。こうして一通りそろった原稿に目を通してみると、様々な人の知識や想いが、文字を通して甦ってくるようです。

これからも「ふじみの」が単なる文集ではなく、畜産学科独自の「ふじみの」に育って行く事を切に願う次第であります。

最後になりましたが、我々委員一同の至らない点を深くお詫びすると共に、おいそがしい所原稿をお寄せ下さった諸先生方ならびに会員諸氏に深く感謝致します。

編集委員一同

昭和53年2月5日発行

発行所 東京都世田谷区桜丘1-1-1

東京農業大学畜友会

「ふじみの」第17号

電話(420)2131 (呼)

編集責任者 高下 徹

印刷所 エルデ・タイプ社

発行者 草野 茂

電話(429)1067

